



1930年代後半の青木病院（中国・北京）。前列右から3番目が著者・青木清志の父・青木陽象、抱かれているのが著者。前列右端より母・鈴子、兄・陽生、1人置いて、祖父、祖父に抱かれているのが弟・三生、隣が祖母。後列は親類や病院関係者

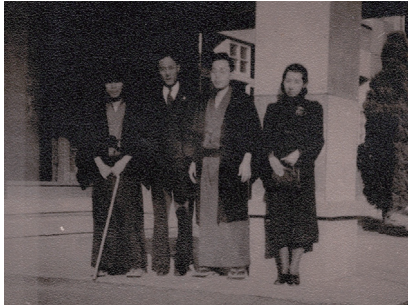


1930年代の青木病院。総合病院の役割を果たしていた





父・陽象の若い頃。父は慶應大学医学部に通っていた





父・陽象は様々な島へ往診に赴いていた。その合間を縫って船上で釣りを楽しんでいた。この様子を朝日新聞社が取材したため、多くの写真が残っている







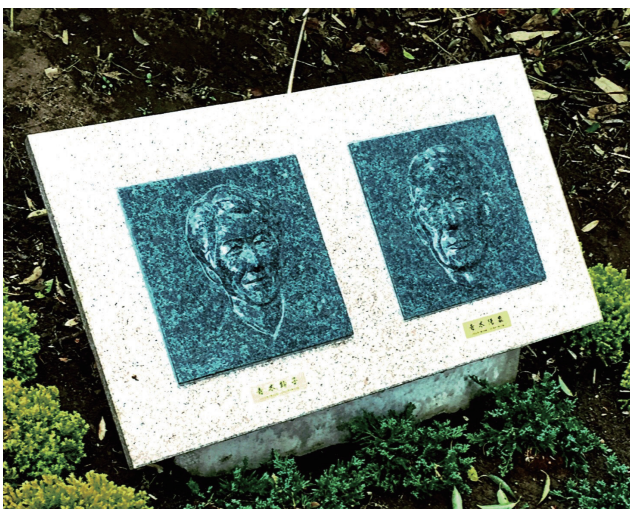
文壇バー「風紋」にて、マダム・林聖子さんと。林さんは著者の舞台芸術学院の同期生



日刊工業新聞社長・井水治博氏とは11回対談を行った



榛名美術記念公園「絵画の館」



榛名美術記念公園にある著者の両親のレリーフ





撮影：菊田真奈

九十年の水痕すいこん

舞台に注ぐ光をもつと

## プロローグ

2019年12月、中国・武漢で新型コロナウイルス感染症の最初の感染者が見つかった。その後、日本はもとより、世界へと感染症は拡大し、パンデミックを起こし、2023年3月現在でも猛威を振るっている。当初より、感染したのちの症状などは和らぎはしたものの、収束したとは言えない。

中国の首都・北京は、私の生まれ故郷である。感染症拡大初期は、中国政府の「ゼロコロナ対策」により、中国の政策は成功しているように見えたが、2022年12月頃から雲行きが怪しくなった。感染者が増え、死者も増えているという。まだまだ予断を許さない状況だ。私は、自らの故郷にもう一度足を踏み入りたいと思っていた。だが、入国制限があり、なかなか行くことができない。やきもきした時間を過ごしている。

人生の締めくくりを迎えるに当たり、改めて故郷の土、風、匂いを感じてみたい。それが叶ったとき、私の心には、かつての北京の光景、友人たち、そして、父や母、兄の姿が浮かぶことだろう。



目次

プロローグ 10

第一部 九十年の水痕 17

第一幕 演劇に夢中だった若い頃——北京で生まれ、帰国後演出家の道へ 18

第1章 北京での幼少期 18

■青木病院の次男として誕生 18

■日本統治下の北京 北平 21

■小学校をサボって映画ざんまい 23

■太平洋戦争勃発、日本へ帰国 26

■日本人でも中国人でもない “無国籍人” 28

第2章 演劇との出会い 32

- 中学で演劇を始め、魅了される 32
- 父と兄との確執、母の援助 33
- 両親が揃った早稲田大学の入学式 36
- 舞芸へ入学、演劇の道へ 37
- 師・土方与志との出会い 41
- 正月に吐血し肺結核を患う、サナトリウムへ 47
- マドレーヌ・ルノーからの助言 49
- 演劇という表現の奥深さ 52
- 演劇の世界から離れる 54

第二幕 演劇に変わる情熱を探して——世界を飛び回った30年間 56

- ニューヨークで劇団に交じる 56
- 商社への就職、仕事を覚える 58

■西ドイツへ駐在、観劇の日々	59
■医療関連、電動車椅子事業に没頭	61
■ダイヤモンド取引を創立、医療機器リース事業が軌道に乗る	63
■誤解から始まったダイヤモンド事業	64
■皇太子ご夫妻に電動車椅子を披露、米国展示会でも好評	66
■前日会ったばかりの友人医師の心中事件	68
■負債4億円の返済、一人の再出発	69
■水ビジネス、ハルナビバレッジの萌芽	71
■両親の死、兄との雪解けの季節	73
第三幕 水とともに、ただ流れゆく——ハルナグループの創立と今	78
第一章 一滴の水を追って	78
■反対の声を押し切って水ビジネスへ	78
■未踏の地・群馬へ降り立つ ハルナビバレッジ創業	80



- 缶からペットボトルへ 勝機をつかむために 82
- 演劇的経営とは何か 83
- 様々な経歴の人財が集う 85
- 顧客づくりと工場建設 観客と舞台を整える 86
- 工場フル稼働 「桃の天然水」の大ヒット 89
- さらになる人財育成 四半期報告会とビジネススクール 91
- 経営難の会社を合併・買収により従業員増 93
- 息子たちの入社、バトンタッチへ 94
- アジア、ヨーロッパを視野に “飲料のプロデューサー” 96
- ハルナグループからの引退 97
- 榛名美術を創設、美術館を始める 98
- はじめたら、おわりはない 99

第2章 今、何を想う

102

■ 日本人とは何か

102

自由であるということ	104
■ 覇権を握り続ける中国という国家	105
■ 過去となりつつあるアメリカとヨーロッパ	106
■ 選択をするということ	109
■ 人をどう見ているのか	110
エピローグ 自分という個を見つめて	113
■ 自身のルーツについて	113
■ 人生を振り返ってみたとき	114
■ 演劇への想いと後悔	117
第二部 青木さんへの回帰	123
一、 出会い	124
二、 思い出の社誌制作	127

三、ビジネスより芸術 142

四、青木会長から青木さんへ 最後の書籍制作 151

謝辞 164

参考文献 166

第一部  
九十年の水痕

## 第一幕 演劇に夢中だった若い頃

### ——北京で生まれ、帰国後演出家の道へ

#### 第1章 北京での幼少期

##### ■青木病院の次男として誕生

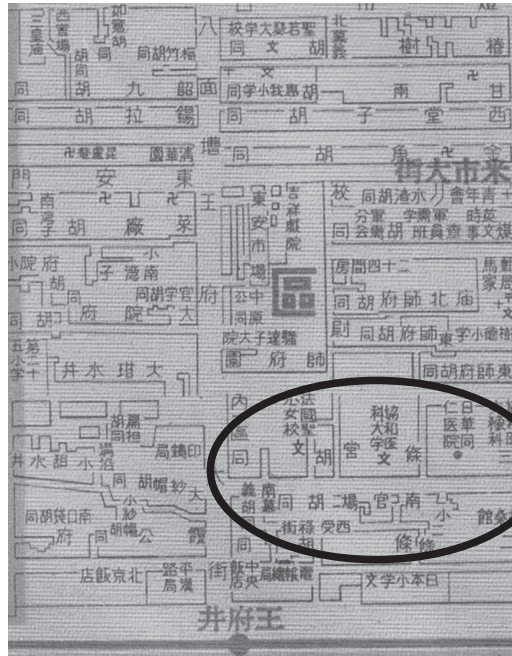
1933（昭和8）年6月27日、私は父・青木陽象、母・鈴子の次男として誕生した。私の3つ年長に、長兄・陽生あきらがいる。

青木病院は祖父の時代から始まった。祖父は慶應義塾大学の医学部を卒業し、軍医として召集され南満洲鉄道の病院で働いていた。

その後、祖父は北京租界にあったフランスの病院を買い取り、青木病院を創業した。祖父は眼科医で、父は内科・小児科医、父の弟は婦人科医だった（パラグライダーの事故で若くして死去）。のちに祖父の弟も合流した。彼は歯科・耳鼻科医だった。病院は、現在の王府井の辺りに所在していた。



第一幕 演劇に夢中だった若い頃——北京で生まれ、帰国後演出家の道へ



1940年頃の北京市街の地図を縮小した。王府井にほど近いエリア、黒丸で囲った辺りに青木病院はあったと思われる。すぐ左のブロックが紫禁城の敷地となる

出所：『目加田誠「北平日記」』（九州大学中国文学会編、中国書店）の付録「最新北京市街詳図」（1941年3月20日、松村好文堂発行）

患者は日本人だけではなく中国人もいた。かの女優・李香蘭（山口淑子。1920（2014）はよく通院していた。看護師は母が日本から招き寄せた女性たちだった。母は何度も日本を往復しては、ふさわしい人を見つけてきたらしい。私も一度だけ母に伴って日本に行ったことがあった。

「何しに行くの」

という幼子の問いに、母は看護師の斡旋を口にしていたことを覚えている。

病院においては、読者の皆さんもよく知っているだろう。消毒剤などにおいて、患者たちから発せられる人のおい、そういったものが染み付いている。大人になってからも、そのにおいがどうも苦手になってしまった。よく父はこんなところで働いていたものだと思っただ。ほどだ。

私には2歳下の弟がいた。三生みつおとあった。だが、三生は脳性麻痺のため幼少時に亡くなった。両親は心を痛めた。特に父にとって、弟の死は大きい。幼かった私には彼との思い出がほとんどない。私と兄が喧嘩しているのをニヤニヤしながら見ていた。その笑顔を微かに覚えてる。

青木病院はほぼ総合病院の役割を果たしていた。父は小児科医でもあった。我が子の病を

治すことができず、死に至らしめたことで、父は病院から小児科を排してしまった。子どもを診ることはなくなった。また、三生の死は後に両親の離婚の遠因ともなっていた。

### ■日本統治下の北京⇨北平

ご存じの通り、北京は様々な王朝の首都となってきた。元（当時は「大都」）、明、清と、特に近世においては間違いなく最大の主要都市で、紫禁城を中心に区画も綺麗に整理されている。

私が生まれる前は、北京は北平と呼ばれていた。1912年に成立した中華民国は南京を都とし、それを表す「京」の文字を北京から外し、北平としたのだ。この名称は1928年から、中華人民共和国が成立する1949年まで続く。

当時の北京の歴史的背景を見れば、1937（昭和12）年、北京郊外で起きた盧溝橋事件に端を発し、日中戦争が勃発した。これにより北京は日本の統治下に置かれ、皮肉なことに一時、北平から北京へと名称も変えられた。1945（昭和20）年に太平洋戦争が終結するまで、この戦争も続いていく。

『北京の日の丸』（北京市政協文史資料研究委員会編）という書籍に、盧溝橋事件勃発の日

の状況が、中国人によって書かれているものが載っている。

ある日の夕食後、みんなで庭で涼んでいて、母は縫い物をし、妹は近所の子と手で拳銃ごっこをし、私は階段に坐って本を読んでいた。突然、西南の方角で「ドカーン」「ドカーン」と大きく二発響いた。(中略)

二〇日余りして砲声が突然やんだので、人々はとても不思議に思った。翌日朝早く戸を開けて見ると、国旗が一夜のうちに換っていた。(史会「現実となった悪夢」)

その後、執筆者は学校に行くと、教師の命令のもと、教科書の「中日の共栄親善」でない箇所をすべて塗り潰させられたという。その中には「中華民国」「精忠報国」などの文字が含まれていた。

日本は盧溝橋事件ののち、北京の都市計画というものを立案していたようだ。北京における日本人の人口も年々増えていた。1930年代初め、北京のある華北地方には日本人が約40万人いたという。1936年には160万人ほどだったが、1939年には410万人にも膨れ上がっていた(越沢明「日本占領下の北京都市計画(1937～1945年)」)。

日本統治下の北京は様々な商売が不景気で、中国人の暮らしは決して豊かではなかった。当時、北京の天橋は遊興の場であったが、ここで金を使うところではない。日本軍に穀物は強奪され、人々はふすまや米ぬか、ドングリなどを混ぜた「混合麵」というまずい麵を食べていた。

私が幼少時代を過ごした北京は、日本軍による占領が続く、正に戦乱の最中だったといえる。

#### ■小学校をサボって映画さんまい

北京で生まれたものの、私が通っていたのは日本人向けの小学校であったから、比較的日本人の子どもが周囲に多かった。名は東城第一小学校といった。日本人が多いといっても、中国人が大半の社会に違いない。当然、中国語を話していた。当時、私たちは中国人のことを「支那人」と呼んでいた。

真面目に小学校に通ったとは言えない。しょっちゅうサボっていた。朝、登校はするのだが、すぐに引き返し、門の陰などにランドセルを隠して仲間と出かけた。

この頃、よく食べていたのは飴玉のようなお菓子が多かった。それと「餡餅」だ。今では縁日などでも売られているように、日本でもよく食されるようになった。私が食べていた餡



餅は、かなり大きなもので、餡が甘かった記憶がある。子どもが食べるために、そういう味付けをしていたのかもしれない。

芝居を観ることは叶わなかったが、子どもの頃から映画が好きだった。だが、そうやすやすと観には行けない。病院の薬局の会計場に行つて、

「お金がいるとお母さんに頼まれた」

などとウソをついて、お金を融通してもらっていた。その金で友だちを引き連れて映画を観に行ったのだ。

そのうち母に露見した。母はとても優しい人だったが、このときばかりは烈火のごとく怒った。母に引つ張られて風呂場に連れて行かれた。何をするかと思いきや、母は私に衣服を脱ぐよう命じ、シャワーの栓を捻って冷水を浴びせてくる。私は泣いて許しを請う。このときばかりは、母が恐ろしかった。父は私がお置きさされているのを知っていたが、母を止めず黙って見ていたと、のちに聞かされたことがある。

祖母は大変厳しい人だった。よくぶたれた記憶がある。祖母の場合は、あまりに怖いので、いじめられているという感覚だった。

日本人が通う小学校であつたが、当然中国人の友だちもいた。顔を合わせるたび、彼らと

は喧嘩をしていた。子ども同士の些細な喧嘩だから、翌日になれば、またつるんでいる。さっぱりしたものだ。大人たちは日本と中国という敵対関係にあったが、子どもたちにはその空気は根強くなかったと思う。映画など率先して連れて行ったものだから、私は近所ではガキ大将であった。

北京には当時、東安市場（現在の王府井周辺）に「泥棒市場」という場所があった。私の病院も被害にあったことがある。ある夜、病院に泥棒が入り、家財道具などを持ってしまった。

父は盗品が泥棒市場で売られているに違いないと踏んだ。私と父が泥棒市場に行ってみると案の定、売られている。「これはうちのものだ」と主張しても、売り主たちは知らん顔だ。埒が明かないので警察に行っても、彼らは非協力的だ。むしろ「証拠を出せ」と言ってくる。おそらく裏で通じているところがあつたのだろう。やむを得ないから、父は盗品を買戻した。

北京時代の父との思い出はそれほどない。ひたすら父は仕事をしていたし、酒付き合いが多かったからだ。お座敷遊びに連れていってくれたことがある。私は大嫌いだつた。

一週間に一度だけ休むので、たまに釣りや狩りに連れて行ってくれたことがあるくらいだ。

場所は盧溝橋に近かった。父は猟銃の扱いがうまかった。獲物は鴨やウサギだ。夜になると獲物を皆で食べた。

### ■太平洋戦争勃発、日本へ帰国

小学校の隣は北京協和医院という大きな病院だった。ここは1917年にロックフェラー財団が創設し、現在でも国内最大級の病院と言われる。日本人の看護師や外国人の医者など、様々な人種の人が勤めていた。

私は小学1年生で、授業を受けていたときだった。外が騒がしくなってきたので、窓から見物していた。すると、日本の憲兵が病院内に入ってきていき、次から次へとアメリカ人を引っ張っていった。彼らを後ろ手に縛り、トラックで連行していく。なぜあんなことをしているのだろう。

あとからわかったことだが、その日は1941（昭和16）年12月9日だった。つまり、真珠湾攻撃が行われた翌日だ。

日本内地での出来事ではなかったが、遠く離れた北京でも太平洋戦争勃発の影響は大きかった。小学校にはわずかに中国人も通っていたのだが、全員いなくなった。子どももそう

だったが、大人たちもどこかギスギスしていた。

先にも登場した『北京の日の丸』に、この時期、中国人から見た状況が詳しいので引用しよう。

八日早朝、日本兵が燕京（筆者注…北京の別名）大学を封鎖し、スチュアートと教員、学生二十余人が日本の憲兵に逮捕され、校舎はただちに日本軍に封鎖され、一九四五年八月一日、日本が敗戦投降した後にやっと撤収した。（侯仁之「燕京大学が封鎖されて」）

私たちが日本に帰ることになったのは1943（昭和18）年のことだ。青木病院は日本軍に接収され、日本人のための病院となった。父はその医師として働かないとならない。そのため、父を残し、母、祖母、兄たちと父の故郷・熊本天草へと向かうことになった。

仲のよかった中国人の友だちとの別れはつらかった。弟の三生の遺骨は母が胸に抱き、天草の父の先祖の墓へと納めた。

後年、母に聞いたことがある。なぜ、あのとき、我々一家は日本に帰国したのか、と。どうやら父は日本が負けることを予感していたようだ。大本営はでたらめな戦況を伝えていた部分があるが、病院という軍人が多く訪れる場所であるから、父は何か確かな情報を得てい

たのかもしれない。

戦争に負ければ、敵国である中国にいるのは危ない。それなら日本に帰ったほうがいいだろう。そういう判断があったようだ。

■日本人でも中国人でもない “無国籍人”

子どもながらに感じていたのは、日本人が威張り腐っていたことだ。とにかく中国人に対してぞんざいであった。日中関係がこじれていることは、さすがに周囲の子どもたちもわかっていた。

かつて中国は「支那」と呼ばれていた。今でこそ蔑称であると思っている読者もいるだろう。だが実態は異なる。その当時でさえ、中国人を「支那人」と呼ぶことは馬鹿にしていることだったのだ。

当時、私は認識がなかったので推測に過ぎないが、両親の近くにはいつも凶体の大きい男性がいた。彼は私が外出するときなども付いてくることがあった。日本人だったのだが、おそらく“用心棒”であったのだろう。彼は、事あるごとに中国人を蹴飛ばしていた。彼以外にも、そういうことは日常茶飯事だった。しかし、私の両親は決して中国人の子どもと遊ぶ



な、とは言わなかった。

なぜこのようなことが行われているのか、私は疑問に思っただけで両親に尋ねたことがある。すると、中国を取り巻く情勢といったものを噛み砕いて説明してくれた。

様々な文献が残っているが、私が幼少期に感じていたことを裏づけるものが実際多いようだ。

一人の日本人が、大きな荷物を背負って乗車しようとしている中国人を足蹴りにしているのを見て心中憤慨に堪えなかった。(目加田誠『北平日記』、「岡田武彦の回想録『わが半生・儒学者への道』」)

支那に生活した日本人が、これまでは、余りにも我利々々で、寛容の徳に欠けていた(後略)

欧米人が多く支那に於て、其の信用と尊敬を勝ち得た理由の一つが、案外に、かうした寛容の態度にあつたらうとは、たやすく推察される。(佐藤清太『北京』)

在留邦人像は、享楽主義に陥り、国家意識を欠くというものや、中国人に対しては差別意識や優越感を持っているというものである。(菊地俊介「日本占領下華北における在留邦人の対中国認識」)

こういうことを知るにつけ、私はかえって劣等感のようなものを抱くようになった。それは羞恥心とも言えるかもしれない。正義感ではない。誇りなどはなく、ただ恥ずかしかった。もちろん、北京にいた日本人全員が中国人に対し差別意識などを抱いていたとは言わない。とかく幼い目には衝撃的な光景であった。

私は生まれてから10歳近くまで、日本内地を知らず、北京で過ごしてきた。楽しい時間も確かにあった。ただ、いい思い出というものはあまりない。

大人になり、現在に至るまで、私の心にはこの頃の出来事というのは鮮明に残っている。いわば、私という人間を作った礎の時代、場所であったからだ。

日本人であることの劣等感がある一方で、日本に帰国したのち「君は中国人なのか」と言われることが稀にあったのだが、それはそれで嫌だったのだ。また、「引揚者」という呼び名があるが、これも嫌悪していた。

私はそのたびに、

「国籍なんてどこだっていいじゃないか」

と答えた。

反対に日本人である、と答えることすら嫌だった。日本人も中国人も人種は違えども、同じ人間ではないか、という思いだ。

法律上、私は日本国籍の人間として生まれている。しかし、国籍なんてものは本当に必要なのだろうか。国民性というものは重要なのだろうか。私は今、このように考えるのだが、北京で生まれたこと、かの地で育ったことが大いに影響している気がする。

## 第2章 演劇との出会い

### ■ 中学で演劇を始め、魅了される

父が遅れて帰国したのは戦後すぐのことだ。ようやく許可が下りた。中国から日本へ帰る者だけが乗った船で、福岡まで戻ってくる。私たちは迎えに港まで出かけた。他の人たちは手ぶらだったが、父はたくさん荷物を持っていた。随分と優遇されたな、と思ったものだ。

日本に帰国してから、私は小学校を卒業したのち、キリスト教系の九州学院中学校（熊本市）へ通うことになった。2年間は野球やバスケットボールなど運動に夢中だった。勉強はほとんどしなかった。

3年生となり、演劇と出会うことになった。担任の富田浩太郎（生物担当）という先生は後に学校を辞めて東京に行き、宇野重吉らの民藝に入り演劇で食べていた。だが、40歳になる前に若くして病気で亡くなっている。

この富田先生が「演劇部をつくる」と宣言した。面白そうだということでいろいろな声をかけ、親友となる小崎義昭をはじめ15人ほどが集まった。

演目はシェークスピアの「真夏の夜の夢」だ。シェークスピアの中で最も有名な喜劇といっている。人間と妖精たちによる恋愛のドタバタ劇である。

演出は富田先生が務めた。「真夏の夜の夢」の読解から、配役、演技指導、衣装・道具・照明・音響、あらゆることを一から作り上げていく。この工程を見るにつけ、私は演出というものに関心を抱き始めた。

いざ上演されると思いのほか、好評を得た。そのときの胸の高揚は今でも忘れない。間違いなく、私は演劇に魅了されたのだ。

#### ■父と兄との確執、母の援助

高校1年のとき、兄が慶應義塾大学医学部にストレートで合格した。父は大変喜び、大学のある横浜（日吉）に引っ越すことを決めてしまう。父の親友の山下さんという方が、離れの家を貸してくれることになった。そこで父は病院を開いた。

私は高校に上がってからも演劇に夢中で、熊本を離れたくはなかったがやむを得ない。一人で残るわけにはいかない。法政大学付属高校に転校し、演劇部に入学した。

実は、中学時代の恩師・富田先生もこの頃、演劇の夢を忘れられず上京していたので、必

然的に私は先生を追いかけることになった。というのも、富田先生は法政高校の教師になっていたからだ。ますます演劇熱を高め、5本くらい演出を担当した。演目は主にシェークスピアだった。

大学へ進学したのち、本格的に演出の勉強をしたいと願った。だが、実践の場というよりも、私は研究者の道に進もうと考えていた。特にシェークスピアだ。これは完全に富田先生の影響による。そのためには、体系的に演出について学べる早稲田大学がいいだろうと密かに目論んでいた。

父と母は、私が高校3年生のときに離婚している。幼少の頃から父と過ごす時間はそれほどなかった。母は優しい人だった。私はこの頃、父を憎んでいた。

理由は他にもあった。父は息子たちに医学の道に進んでほしかった。兄はその点、素直であり優秀な人だから、医学の道に進むことに異論はなかったのだろう。開業医の道こそ選ばなかったが、研究の道に進むことを志していた。

かたや私は演劇の道に進もうとしていた。当然、父と兄は反対した。ただ、父はあまり口うるさくは言わなかった。兄の方が躍起になって反対してきた。

あるとき、兄が私の進路について聞いてきた。私は演劇の道に進むことを明言した。演劇では食えないからやめろ、と兄は一蹴した。

すでに大学受験の手続きは揃っている。祖父、父、兄が通った慶應義塾大学の受験だ。私はこれをすっぱかした。兄は大変怒り、取っ組み合いの喧嘩になった。

兄は自身が医学研究の道に進むため、家業を継ぐ気がなかった。つまり、父と同様、開業医になることはしなかった。代わりにというのか、私が跡を継ぐことを期待していたのだ。それが頓挫するものだから、兄も必死だったのだろう。家を思って、父を思って、ということとはよくわかる。

だが、私はどうしても演劇の道に進みたい。密かに早稲田大学の入試テストを受け、幸いというか、合格することができた。父や兄に言っても入学金や授業料を支払ってくれるとは思えなかった。諦めていたところ、母が味方になってくれた。母はどうやって捻出したのかわからない。お金を貯め込んでいたのか、早稲田の入学金と1年分の授業料を用意してくれたのだ。



## ■両親が揃った早稲田大学の入学式

少し時間を遡る。

早稲田大学の受験会場の教室を覗くと見覚えのある顔があった。

「おお」

同時に声を発した。

熊本の中学時代の演劇仲間だった小崎義昭がいるのだ。どうやら彼は理工学部を受けるようで、合格したら学生演劇に参加するため早稲田を受けるということだった。

実は小崎とは引越したのちも連絡を取り合っていた。私の家庭の事情を打ち明けていたので、早大受験は叶わないだろうと吐露していたのだ。互いに会えないと思っていたので、この再会は嬉しかった。

小崎も私も無事合格し、彼も入学後は演劇を堪能することができた。そして彼とは生涯の友となった。彼は大学卒業後、数学の教師となり、郷里・熊本の学校に勤めた。

小崎は数年前に亡くなったのだが、亡くなる半年前にお別れのメールをよこしてきた。いくら友人とはいえ、なんと返していいものか逡巡したものだ。その後もたびたびメールをもらった。「あと2ヶ月だよ」と。その都度返信をした。「そのうち俺も行くから先に待ってる」。

いくらか慰めになっていれば、と願いながら。

入学式が行われ、私が会場を出ると、正面の人混みがさっと掻き分けられたような瞬間があった。奥に二人の男女が立っている。彼らは私を見つめている。離婚した両親が私を待っていたのだ。

おそらく母が父を誘ったのだろう。母は私の早稲田大学入学までの道筋を整えてくれただけなく、資金まで用意してくれた。離婚し遠い山口に帰ってしまった母が、父と一緒にいる姿を見て、私は北京時代の幼い自分を思い出していた。いたずらばかりしていた異国での生活、日本人であることの葛藤に苦しみ、父や兄との確執があらうとも母だけは常に味方してくれ、私の心を慰めてくれた。

父と母の元に合流し、おそらく私たちは言葉をかけ合った。あるいは涙で頬を濡らしていたかもしれない。その想い出は、そっと胸の奥にしまっておこうと思う。

### ■舞芸へ入学、演劇の道へ

1953（昭和28）年、晴れて早稲田大学に入学することができた。だが、実家にこの

こいるわけにはいかない。父に聞いている、追い出すようなことはしなかったが、私は家を出た。父を裏切った。私の心情は、そこにある。裏切った以上、この家には住めない。

私は仲間数人と東京・下北沢の下宿に住むことになった。そのうちの一人が受験のとき、再会した小崎だった。一人のスペースはわずか3畳ほど、ここが私の生活の場となる。本当に寝るだけの部屋だ。

早稲田では演劇の仲間がぼつぼつといた。その頃の早稲田は「語学棟」というのがあって、全学部の学生はそこで英語やフランス語などを学ぶ。普段、あまり他学部の学生との接点がないのだが、ここに行く和交流ができた。

とても仲がよかった男がいて、意気投合したのだが、次第に彼は学校に来なくなった。後に聞いたところによれば、彼は疾うに亡くなっていた。長生きしていれば、彼と何かやっていたかもしれない。

当時、早稲田の演劇科には河竹繁俊さん（1889～1967）がいらした。河竹黙阿弥の娘の養子となり、早稲田大学演劇博物館館長を務めていた。浄瑠璃や文楽、演劇の学者であった。

河竹さんは私たちの教務主任だった。最初の授業で、彼は私たちに文楽を観させてくれた。

私は初めての文楽観劇だった。河竹さんは文楽の作家でもあったから、いろいろと解釈をしてくれた。大変勉強になった。

早大在学中は、4回ほど演劇を行った。すべてシェークスピアだった。演劇博物館で上演する際、観客は皆立っている。シェークスピアの故郷ストラトフォード・アポン・エイボンにある劇場は天井がなく、雨が降っていると、皆傘をさして観ていた。演者と観客の距離が近い。それを模していた。

やはり早稲田というシェークスピアのイメージがあった。早稲田で教えていた坪内逍遙（1859～1935）はシェークスピア作品をすべて翻訳し、それを記念して演劇博物館が建てられたのだ。だが、逍遙の翻訳は言わば「歌舞伎調」だったから読みにくい。後年、小田島雄志が全訳したが、それはだいたい先の時代だ。私はシェークスピアを通して、英語を学んだ。

早大に入学したと同時に、土方与志よしさんが副校長を務める舞台芸術学院（舞芸）にも入った。舞芸は1948年、秋田雨雀あまなぐ（1883～1962）を校長に迎え、設立された演劇学校だ。高校時代、土方さんの演劇を観て感銘を受けた私は、土方さんがいるという、ただそれ一心で舞芸に入ったのだ。

現在はおよその大学の授業料は年間支払いであろう。だが、その頃の早稲田は月払いだった。当時の金額で1500円くらいだったと記憶する。舞芸の方は月1000円支払う必要があった。

とにかく働いて稼ぐしかない。日中は授業があるから夜に働く。サンドイッチマンをやったり靴磨きをやったりした。

中でも助かったのは新宿の餃子屋だ。親父さんは私が客を連れてきたりすると、プラスで時給を払ってくれた。当時の時給は100円、チャーシューメン1杯80円の時代だ。もちろん賄いも食べさせてくれた。反対にいうと、一日の食事はこの賄いが中心となる。とても三食は難しい。

さすがに自分一人の体だけでは、とても授業料と生活費を稼ぐことは難しかった。私は大学を休学せざるを得なかった。授業料が払えないからだ。

ところがある日、大学に行くと、

「授業料が払われました」

と事務方から連絡があった。

どうということだろうと思っていると、事情がつかめた。母が支払ってくれていたのだ。母

は、私の性格をよくわかっていた。父と兄に反対して家を飛び出し、意向に反した大学に入った。きつと父に頼ることはしない。だが、学生の身で学費を稼ぐなんて、たかが知れている。そんな状況をもともと予想していたのだろう。母は離婚後に戻っていた山口のレストランで働いており、私の授業料を稼いでくれたのだ。

私はこのことを父から知らされた。父も母も、私の夢を黙認してくれていたのだろう。

#### ■師・土方与志との出会い

ここで、土方与志さんについてまとめて書いておこう。

高校時代、私が演劇の世界にますますどっぷり浸かることになる出会いがあった。それが演出家・土方与志との出会いだ。

土方さんは1898（明治31）年、東京・赤坂に生まれた。父が同年7月に自殺し、母方の祖父・加藤子爵家へ引き取られる。1916（大正5）年に学習院高校に入学し、このとき、同級生の近衛秀麿（近衛文麿の弟）たちと友達座を結成した。翌年には、19歳でエフレーノフの「陽気な死」を演出、これが土方さんにとって初めての演出作品だった。のちに東京帝国大学に入学し、小山内薫と知り合い弟子となる。

1922（大正11）年、土方さんは単身フランスへ渡った。その帰路、ベルリン、モスクワを回り、当時のソ連の演劇に衝撃を受けることになる。スタニスラフスキー・システムを知ったのもこの頃だ。

1924（大正13）年、私財を投じ、小山内薫らとともに築地小劇場を創立した。しかし、小山内が急死することで、劇場は分裂していく。丸山定夫や薄田研二らと脱退し、新築地劇団を結成する。以降、土方さんは不遇の時代を迎えた。

海外を転々とし、1941（昭和16）年パリから帰国した直後、特高により逮捕され、刑務所暮らしとなる。釈放されたのは、戦後であった。1948（昭和23）年、中央演劇学校の校長に就任し、直後、舞台芸術学院を創立、翌年二つの学校が合併した。1959（昭和34）年6月4日永眠。享年61歳だった。

私は舞芸の6期生として入学した。4期生に高校時代の先輩がいて、舞芸のことは前から知っていたのだ。現在でも親交の深い声優の羽佐間道夫、俳優・山田吾一（1933～2012）、のちに新宿で文壇バー「風紋ふうもん」を開いた林聖子（1928～2022）。1年留年し同期生となった）などが同期だ。6期生の中で演出家を目指していたのは私だけだった



と思う。皆、俳優を目指していた。

舞芸ではないが、劇団四季の浅利慶太（1933～2018）とは仲がよかった。彼と私は同じ年だった。彼は非常に厳しい人であったが、やはり当時は飯が食えなかった。付いていけないということで辞める者も多く、浅利もあの頃は苦労していた。

舞芸では土方さんの演出助手を務めた。とはいえ、具体的に何かしていたわけではなく、ただ付いて、ひたすら学んだ。シエークスピアの「十二夜」をやったとき、私は演出助手として名を連ねたことがあった。

土方さんはスタニスラフスキーの論文などを積極的に翻訳し、日本にこの思想を広めていった。このシステムはいわば革命を起こしたのだ。

コンスタンチン・スタニスラフスキー（1863～1938）は、ロシアを代表する演出家・俳優だ。1898年にモスクワ芸術座を創立し、チェーホフやゴッリキーの作品により、世界的な名声を得る。

彼が提唱した演技理論は「スタニスラフスキー・システム」といわれる。端的にいえば、役者の潜在能力を発揮させる演技指導といったところだ。たとえば、このようなことを言っている（レオニード・アニシモフ『スタニスラフスキーへの道』より引用）。

俳優には、注意の対象が必要である。ただし、客席ではなく、舞台上に必要であり、そのような対象が魅力的であればあるほど、俳優の注意を引きつける力は強い。

俳優が「どこまでが役で、どこまでが自分なのか」見分けられないほど、自分の中ですべてが融合しているとき、そのときこそ、本物の創造が始まるのだ。

フロイトの心理分析にも通じるものがあり、当時革新的であった。

かつて早稲田大学には自由舞台という劇団があった。劇団員は40人くらいだったと思う。女性は大変少なく、2、3人しかいなかった。これでは芝居ができないということで、よそから連れてくることもあった。私は舞芸にも通っていたので、そこの仲間にも声をかけた。ユージン・オニールの「あゝ荒野」をやったことがあるが、そのとき私は演出を務めた。

その自由舞台でゴリキーの「どん底」をやるということで、私の元に高橋淳一が相談に来た。高橋は今でも良き友人で、このときも彼特有の人懐っこさで、

「土方さんから『どん底』の演出ノートを借りられないだろうか。土方さんはダンチエンコの演出ノートを持っているはずなんだ」

と頼んでくる。

ダンチエンコとは、スタニスラフスキーとともにモスクワ芸術座を創立したロシアの演出家である。

土方さんは築地新劇場の時代、「どん底」の演出をしている。それを参考にしたというので、お宅へ伺った。ずいぶん厚かましいことだと思つて逡巡したが、話すと土方さんはすんなり承諾してくれ、「しばらく貸してあげよう」と高橋にノートを差し出した。

土方さんの部屋の本棚には、ずらっとドイツ語の書籍が並んでいた。本当に勉強熱心な方だった。語学についても大変精通されていた。

土方さんの奥様・梅子さんは、実に世話好きな方で、私などがお宅に伺うと決まって、「ちゃんと食べてますか」

と、晩御飯を振る舞ってくれる。

なにせ一日一食か二食しか取れない生活だったから、ありがたかった。遠慮なく食べた記憶がある。

このときも私と高橋はご馳走になった。高橋に至っては、井飯をおかわりするくらい遠慮がなかったが、梅子さんは笑って応じてくれた。

「いやあ、うまかったなあ」

高橋は帰路、満足そうに笑っている。演出ノートを借りに行ったのか、飯をご馳走してもらいに行ったのか、わかりやしない。それくらい屈託のない青年だったのだ。

社会主義や共産主義の風潮が強い時代だったが、土方さんは当時のソ連から思想面での影響というものは受けなかった。何度もモスクワを訪れたのは、純粋にロシア演劇に惹かれたからだ。実際、ロシアの演劇はフランスやドイツとは異なった魅力がある。逮捕するなど言語道断である。舞芸自体も無思想の場であり、左翼とは程遠かった。

私も同様だ。思想など関係ない。純粋に土方さんに惹かれていたのだ。彼の元で学びたい。演出をやりたい。その一心だった。

土方さんは、

「演出家とは学校の先生だ。演劇とは学校なのだ」

と、よく言っていた。時には生徒から教わることもあるのだ、と。

■正月に吐血し肺結核を患う、サナトリウムへ

日中は授業、夜は仕事、節約するため食事はまともにと取らず、物理的に睡眠時間もなかなか取れない。いくら若いとはいえ、無理が祟っていたのだろう。

1958（昭和33）年元日、寒い日だった。火鉢に覆いかぶさるように暖を取っていると、激しく咳き込んだ。火鉢の灰が舞い上がる。両手がぬらっとしていいる。見れば、真っ赤な血で染まっていた。

友人が救急車を呼んでくれ、すぐに病院に運ばれた。数日、意識を失っていたようだ。次に目を開けたとき、私は病院のベッドにいた。側には母の泣き顔がある。父と離婚し、郷里の山口に移っていた母に、友人が連絡してくれたのだろう。私は実家の連絡先を友人などに伝えていなかった。

病名は栄養失調と過労による肺結核だった。今こそ肺結核は、罹患したら即ち死、という病ではなくなった。だが、戦前は罹った当人はもちろん、近くににいる者にうつっても死んでしまうほどの病であった。戦後はストレプトマイシンの普及などにより、結核患者は急速に減ってきてはいた。

ただ、厄介な病気であることに違いなかった。実際、結核は難病指定で医療費がかからな

かった。私は医師にとにかく静養し、栄養を摂れと言われ、胃薬のようなものを飲まされていた。

佐賀のサナトリウムを紹介してくれたのは父だった。肺結核で入院する。頭ではわかっていても受け入れがたい現実ではあった。

九州へと向かう当日、東京駅に多くの劇団仲間が見送りに来てくれた。病を治し、東京に戻ったら、また演劇をやる。皆口々に励ましてくれたが、私の心は暗澹たるものだった。

医師は肺の一部を切除する手術を提案した。だが、肺を切るのは演劇人にとって致命的である。声量が落ち、舞台で指示などが出せなくなってしまう。いくら舞台俳優ではなく、演出家だとしても、それは避けない。

良くないことは続くものだ。サナトリウムに入院してまもなくのことだった。1959（昭和34）年6月4日、土方さんが亡くなられた。新聞の訃報欄で知ったのだ。通夜や葬式に行きたくとも行けない。ひとり枕を濡らして追悼した。

同月27日、私はサナトリウムで誕生日を迎えた。これほど暗い気持ちの誕生日はなかった。私は26歳になっていた。

■マドレーヌ・ルノーからの助言

サナトリウムは原則外出禁止ではあったが、ずっと籠ってはいられない。禁を破り何度か舞台を観ようと抜け出した。

1960年、フランス人俳優のジャン・ルイ・バロー（1910～1994）が来日した。彼の代表作、映画「天井桟敷の人々」は1945年にフランスで公開されたが、日本でも1952年に公開され、私は彼の演技に魅了されていた。

さすがに東京には行けない。調べたら2日間だけ福岡に来ることがわかった。どうしても観に行きたい。千載一遇のチャンスである。母には申し訳ないが、医者に嘘をついた。母が急病で駆けつけないとならない、と。外出許可を堂々と取り、夜の福岡へ向かった。

期待以上の驚きと感動だった。フランスの演劇はこれほどまでに素晴らしいものだったのか。ジャン・ルイ・バローは演出も行い、主役も演じていた。演目はやはり「天井桟敷の人々」だ。彼は有名なパントマイマーでもある。言葉を発することなく演じる。それでも、何を演じているのかはわかるし、言わんとすることもわかる。

彼は女優のマドレーヌ・ルノー（1900～1994）と結婚しており、彼女は劇団のメンバーでもちろん出演していた。彼女も実に素晴らしく、魅了された。



公演後、興奮を抑えきれず、何の紹介もないままに楽屋裏へ侵入した。むしろ、誰にも許可を取らなかったことがよかつたのだろう。案外、すつと忍び込めてしまった。楽屋の扉にジャン・ルイ・バローの名が掲げられている。すぐにノックした。出てきたのは、マドレーヌ・ルノーだった。彼はどうやら不在だったようだ。

「何の用？」と彼女が問うてきた。演出家を目指しているのだが、今日の舞台を観て、フランス演劇を学びたいと思った。そのためにはどうすればいいのか。率直に質問をぶつけてみたのだ。

この頃、マドレーヌ・ルノーはもう壮年期を迎えていた。ベテランといってもいい。突然押しかけてきた日本の若者を邪険にせず対応してくれた。

マドレーヌ・ルノーは何度も小首を傾げる。どうやら私のフランス語が拙いせいで、全部を理解できないようだ。ゆつくり喋って、かろうじて趣旨はわかってもらえた。

パントマイムであれば言語は使わないので、まずそれから学べないだろうか。浅はかな考えだと思つたが、尋ねてみた。マドレーヌ・ルノーは寛容な人で、笑いながら答えてくれた。パントマイムは確かに喋らない。けれど、言葉をすべて解すほどの言語力がないとパントマイムはできない。パントマイムは言葉を発するぎりぎりを演じるのだから。演出家になる

なら、あなたのフランス語のレベルだと厳しい。フランス語の台詞を言え、すべて理解するくらい堪能でないとならない。概ねそのようなことだった。

喉まで出かかっている言葉を発することなく、体で表現する。その限界がパントマイムなのだ。彼女の言っていることは半分しかわからなかったが、この言葉は大変印象的だった。

とにかくフランス語を勉強しないとならない。話せなければフランスで演劇を学ぶどころではない。演出家は時に俳優に厳しく指導する。そのとき、言葉が出てこないようでは双方困ってしまう。かつてフランス演劇の練習風景を視察したことがあった。何を言っているのか、まったくわからない。普通のフランス語ではないし、早口だったからだ。

状況として、健康を害しているこのときの私が語学を学ぶことは極めて難しい。語学学校へも通えない。もどかしいことであった。嬉しい一日だった。だが、未熟さを痛感させられる一日でもあった。

後日、私は母にこっぴどく叱られた。嘘をついて病院を出たことがバレたのだ。どうやら看護師が母に、

「久しぶりに息子さんに会われてよかったですね」  
などと言ったようだ。

母は自身が病になって、その見舞いに行くといった私の嘘自体も嫌だったのだろう。母には悪いことをした。

### ■演劇という表現の奥深さ

演劇を表現方法と捉えたとき、表現する側もそれを受け取る側も難しい手法であるだろう。端的にいえば、演劇とは「総合芸術」だ。これに対して、音楽は「専門芸術」といえる。

演劇は一つの要素のレベルを高めることが求められるのではなく、バランスを大事にする。集合体としての形が問われる。私は演劇に、無限に広がる可能性を求めていたのだ。

ただ、演劇の場合、映画ほどに無限に広がる必要はない。というのも、演劇は劇場に限られた人数を招いて、観劇してもらうことになる。劇場のキャパシティにもよるが、例えば一つの上演回に対して200人しか観られない。

演劇は「瞬間の芸術」でもあり、演じる側も観る側も毎回異なった空気を感じる。今日がこうであっても、明日になればわからない。つまり、同じことをしているようでありながら毎回異なるのだ。舞台は生きている。演劇は真に人が創っている。

対して映画の場合、観客がいなくとも成り立つ。撮影された動画であるのだから、出演し

ている俳優は「観客の入りが少ないな」「まったく笑っていないな」などと感じることはない。だが、演劇の役者や演出家は違う。お客の反応をダイレクトに受け取ることができる。舞台から見ているとおもしろいもので、様々なお客がいる。拒否しているのだろうか、そう感じることもある。

いわば、お客と一体となって空間を創っているのだ。ここが大いに映画と演劇との差異でもある。換言すると、演劇には制約が伴う。演劇は大衆のものではないのだろう。演劇を観に行くことは、贅沢な楽しみともいえるのだから。

人間誰しも、未来を頭で想像できても、それを具現化することは難しい。演劇はストーリーを通して、それを形にすることができる。俳優は役になりきろうとする。

しかし、なかなかきれいなものではない。自分ではそのつもりであっても、結局のところ、お芝居に過ぎない。どれだけ真実に近づけるかが役者の真髄といえる。ただ、役者はあまり気にし過ぎないことだ。そこに演出家による演出が入る。「今日はここがよかった」「明日はここをこうしよう」といった演出家の指示は毎回ある。

加えて、俳優は必ず個人個人、役に対して解釈をしている。演出の狙いと役者の狙いがびつたり合致していればいいのだが、間違っている場合もある。素養の問題もあるだろう。我流

にこだわる者もいる。演出家は俳優がより役になりきれるよう指導していく。しかし、もう一度分析し、解釈し直そうとする俳優は少ない。

誤解がないように言えば、演劇と映画のどちらが良い悪いという話ではないということだ。映画も好きだし、小津安二郎のような淡々とした世界は、むしろ演劇に通ずるものがある。中でも感銘を覚えたのは黒澤明の映画だ。彼の映画は映画でしかできない。非常にスケールが大きい。演劇では実現できないことを成し遂げている。

また、日本の場合、プロデューサーというものの存在が外国に比べ小さい。やはり会社資本を前提としている。個人でも行っている例はあるが、なにせお金が続かない。そこに一つの限界があるように思えた。

### ■演劇の世界から離れる

周囲でも「日本の新劇はつまらない」という声が大きくなりつつあった。土方さんは思想の影響を受けなかったが、演劇界全体を見れば影響を受けていた。新劇＝左翼というイメージは強く、一般の観客は置き去りにされてしまった。先ほど、演劇は「集合体」と書いたが、それは観客も含むのだ。観客あってこそ演劇である。

それに芝居では飯が食えない、生きてはいけないという現実もあった。それに比べて、外国は違った。外国の場合、周囲の人間も演劇をやることに理解がある。国も演劇に対して資金援助をする。日本の場合、理解もなければ食うこともできない。アルバイトをしながら、細々とやるしかない。演劇を職業というには無理があった。

舞芸時代からの親友・羽佐間は演劇の世界を離れテレビに進み、映画「ロッキー」の主演を演じたシルベスター・スタローンの日本語吹き替えを機に声優の仕事を増やし、今でも精力的に声優活動を行っている。山田吾一はNHKの「事件記者」というドラマで注目され、以後テレビドラマに引っ張りだこになった。

私は演劇の世界から離れるべきかどうか、誰にも相談しなかった。さんざん父や兄に反対されてきたのだ。今さら、誰に相談するというのか。

何よりも土方さんの死が大きかった。いくら体を壊そうとも、土方さんが生きていたら、私は無理してでも演劇界に残ろうとしただろう。

## 第二幕 演劇に変わる情熱を探して

### ——世界を飛び回った30年間

#### ■ニューヨークで劇団に交じる

ニューヨーク時代は演劇を観ることに夢中だった。まだ完全には諦めきれない演劇への想いが、ふとした瞬間に頭をよぎる。また、ニューヨークという都市はそういう想いや夢を追いかける何かがあった。自由な風、種々雑多な人々の熱気などが街の至る所にある。

特にマンハッタンの南端に足繁く通った。「オフ・オフ・ブロードウェイ」が目当てだった。オフ・オフ・ブロードウェイというのは、あのブロードウェイ劇場に対抗した演劇運動のよななものだった。

1960年代当時、商業主義的なブロードウェイ、追随するオフ・ブロードウェイに対し、オフ・オフ・ブロードウェイは実験的な演劇を志していた。カフェや小劇場といった、大劇場ではない場所で演劇を行うことも特徴的であった。ここに所属する劇団員は他の仕事に就いていることが多いため、演劇に収益を求めていない。採算度外視でやりたいことをやって



いるという感がある。日本でいう「アングラ劇場」や下北沢にあるような劇場をイメージすると分かりやすいだろう。本当に皆、演劇が好きなんばかりだ。

当時そのエリアには大小様々な劇場が点在し、60〜70くらいあったと記憶している。私は毎週のようにそこへ通った。夜7時くらいから始まり、いくつか観ていると10時くらいになっている。

とにかくおもしろかった。その頃、私はマンハッタンの中央通りに住んでいた。北側と南側は賃料が高かった。そこから南には歩いて1時間くらい、普段は地下鉄を利用していた。

ある夜、何となしに歩いて帰宅しようと思いついた。すると徐々に雰囲気の良いエリアへと足を踏み入れてしまったようだ。「これは危ない」と思い、慌てて地下鉄に乗り込んだ。大家や友人に話したら、「そんな危険なことをするな。地下鉄を使い」と窘められた。とにかく夜は歩くな、ということなので、以後、ニューヨークの夜歩きはしなかった。

そのうち最も観ていた劇団に所属する男が、声をかけてきてくれた。

「俳優になりたいのか」

「いや、演出家になりたいんだ」

「そうか。それは困ったな。うちでは演出は勉強できないよ。作品はあるのか」

首を横に振った。私は戯曲を書くことはできなかったのだ。

「でも、まあ良ければ毎週おいでよ」

ひよんなことから、私は劇団に参加することになった。そうは言っても、舞台上上がる俳優ならまだしも、演出の手伝いをしてもらって稼げるわけではない。借りている部屋の賃料も支払いが滞りがちになる。さすがに両親を頼るわけにはいかない。

それに当時、ニューヨークに滞在し続けるにはビザが必要だった。ただ、ビザがなかなかおりない。トータルで2年半くらいいたのだが、観光ビザで出入国を繰り返すなど生活が落ち着かない。

せつかくの演劇との接点ではあったのだが断念せざるを得なくなった。つくづく演劇とは縁が続かない。悔しい想いだった。

### ■ 商社への就職、仕事を覚える

帰国後、アルバイトをしたり徐々に社会復帰をしていった。もう30代となり、決して若いとは言えない。熊本でのアルバイト後、再び上京し「三新貿易」という商社に入社した。

私は演劇に明け暮れ、3年もサナトリウムにいたから、経済の「け」の字も知らなかった。

なかなか仕事も覚えられない。これはまずいと思い、津田塾大学のビジネススクールに通うことにした。当時、ビジネススクールは珍しかったと思う。そこで経済などの基礎を学んだ。

第三幕でも触れるが、私はハルナビバレッジ創業後、2005年にビジネススクールを開校した。自分自身がそうだったように、いくら大学で勉強をしたからといって、社会に出たら知らないことばかりだったりするものだ。きっと自身の無知を恥じだと捉える人もいるだろう。だが、恥じることはないのだ。わからないことはわからない。素直に言える方がいい。私はこのときの体験があったから、後年、ビジネススクールを開こうと考えたのだろう。

#### ■西ドイツへ駐在、観劇の日々

商社で四苦八苦しているうちに、西ドイツ駐在の話が舞い込んだ。「フランスやドイツの演劇が観られるかもしれない」。私はその辞令に応じ、1965年1月一人渡航した。

工業大国である西ドイツは、当時、医療関連の最先端を行っていた。西ドイツを拠点に欧州各国に医療用機械の電子部品を販売することが私の使命だった。

滞在先はハンブルクだった。ここでの生活は、私に合っていたと思う。滞在先の大家さんも親切だった。ただ、当初食事は苦労した。朝、晩と食事を出してくれたが舌に合わない。

郷土料理に近い、独特なものだった。

ある日、半分残してしまつたら、大家さんが心配してくれた。

「食欲ないの？」

「いや……申し訳ないが、食事が合わないみたいです」

正直に答えたら、どういう味が好みか、と聞いてくれる。大家さんはどこから手に入れたのか、和食に関する書籍を読んで勉強したらしい。少しずつ味付けが変わってきた。本当に優しい人だった。

目論見通り、仕事終わりに演劇を堪能することができた。殊にモリエールやラシーヌなど、古典劇をよく観た。当然ながら日本の演劇で観るのと感動は異なる。時にはマチネも観られた。だが、反対に休日でも仕事をするところがあり、これは予想外のことではあった。休みだからこそ、ゆっくり演劇を観たかった。

当時のソ連で、運よくモスクワ芸術座の演劇を観ることもできたのだ。演目はチェーホフの「三人姉妹」だった。2日間滞在して観劇したのだが、こんな演劇は観たことがないといふほどの衝撃を受けた。土方さんが夢中になったのも、よくわかる。

演劇の他に、草野球も楽しんだ。中学時代、野球をやっていたことがあったから、現地の

日本人の方々に交じって、ライン川の河川敷で野球に興じた。その頃、国際弁護士・浜四津尚文と知り合うことになる。彼の夫人は敏子さんといって、のちに環境庁長官を務めた。

当時のドイツ人は、やや横柄なところがあつた。戦後、東西に分裂したものの、西ドイツは工業大国になりつつあつたため、自信を取り戻していた時期だつたのかもしれない。特にアメリカ人に対しては自尊心が強かつた。

だが、日本人には優しかつたように感じる。かつての戦争のシンパシーといったものがあつたのかもしれない。少なくとも私はドイツで嫌な思いはしなかつた。

#### ■医療関連、電動車椅子事業に没頭

各地の病院を巡るうちに、ひとつの出会いが訪れた。それが車椅子だつた。その頃の欧州はすでに障害者が社会に進出すべく、受け入れ態勢を整えようという動きがあつた。日本はその点、かなり遅れていた。街で車椅子を見ることなど皆無に近かつたのだ。

西ドイツ滞在は3年間だつた。帰国した私は、早速電動車椅子の開発に乗り出した。当時、電動車椅子はないわけではなかつた。ただ、基本動作は前進が中心で、施設内ならまだしも公道で使うには向かなかつた。私は、前後左右に移動できるものを考えていたのだ。

会社の許可を得て、責任者となり、車椅子開発に夢中になった。おそらく私は演劇に代わるものを、自然と探していたのだろう。志半ばで病に倒れ、いまだ燻る演劇への想いを断ち切れず、それならば、それよりも上回って夢中になれるものを求めていた。それが電動車椅子だった。

様々な試作を繰り返し、電動車椅子の前段階として機能車椅子が1年後に完成した。ただ、細部にこだわったため、販売価格が通常の3、4倍になってしまう。また、1960年代の日本はまだ和室が圧倒的に多く、畳に布団を敷いて寝ていた。生活様式が合わないところがあった。

欧州へ輸出すると徐々に売れ始めた。会社の方も手応えを感じたようので、福祉機器部門を立ち上げ、私を責任者に任命した。いよいよ電動車椅子に取りかかる。

360度方向転換できる電動車椅子を志向したが、当時の技術では難しい。モーターやギアの研究は続いた。しかし、順調に来ているところで、会社側がこれ以上、予算をかけられないと言ってきた。研究開発はここで打ち切りとなってしまう。「演劇と同様、ここでも断念しないといけないのか」。私は失望を抱きつつ、何とかできないものかと模索していた。すぐに答えは出た。自分でやるしかない。

■ダイヤモンド取引を創立、医療機器リース事業が軌道に乗る

「商社には10年間勤めた。それを辞めて『ダイヤモンド取引（のちにジャディックと改称する）』を4人の仲間と設立した。そのうちの一人が、一緒に土方さんの家を訪ねた高橋淳一だった。彼は英語が流暢だ。それもそのはずで彼は当時、ニューヨークにいたからだ。」

「電動車椅子の開発には多大なる費用が必要となる。そのため、全国の病院へ医療機器をリースする事業を始めた。簡単にいえば病院とリース会社の仲介である。幸いなことに医師の知り合いは多かった。前の会社の縁が活きた。一方で、リース会社は貸し倒れリスクを避けるため、私に連帯保証人を求めてきた。」

「この事業がうまくいくと、金融機関から融資を受けられるようになり、医療機器を購入することができた。そうすると、リース会社に一度卸す必要がなくなる。直接病院に卸すため、マージンがかからないので、当然利幅も広がる。」

「しかし、金融機関はリース事業の融資は通してくれたが、車椅子の開発においては首を縦に振ってくれなかった。失敗のリスクが高すぎる、というのだ。困っていたら、友人の医師が3000万円投資してくれた。これで開発に乗り出せる。私が展望していたのは、両手両

足に障害を持つ人でも利用できるような音声操作可能な車椅子だった。

私は商社に勤める前、福祉事務所でアルバイトをしていたことがあった。そのとき、手足が不自由な人を多く見ていた。この人たちが自由に動作できればいいのに、という思いは強く頭に残っていたのだ。

三洋電機をはじめ、医療機器メーカー数社と手を組み、共同開発チームを作った。さらに増資をした。トータルで6000万円、それでも費用は足りない。

#### ■誤解から始まったダイヤモンド事業

「あなたのところはダイヤモンドを扱っているんでしょ」

「いえ、うちは社名がダイヤモンド取引というだけであって、ダイヤは扱っていませんよ」  
開発費用の件で頭を悩ましていたある日、知り合いの医師とその奥さんと会った。彼女は私がダイヤモンドなどの宝石を扱っていると思い、良質なダイヤモンドが手に入らないものかと相談してきたのだ。私は苦笑いで応じたが、大変なヒントになった。ダイヤモンドを輸入できないだろうか。

当時の日本は高度経済成長からバブルへと経済がうなぎ登りの時代であった。富裕層も



徐々に現れていた。そういう経済・社会的背景もあったのだ。

早速、ダイヤモンドの大手加工企業を視察するため、ニューヨークに赴いた。当時カットしたダイヤモンドの取引は、ニューヨークが世界最大であった。演劇の未練を断ち切ったニューヨークへ、まさかダイヤを求めやってくる日が来るとは思いもしなかった。

加工企業の社長に会うと、日本で売らないかと話を持ちかけてくる。お望みの質のダイヤモンドを、と言ってくれた。GIA（米国宝石学会）という公的鑑定組織があり、その鑑定書に基づいたダイヤモンドを取引する段取りができた。価格も交渉の末、割とこちらに有利になった。

輸入したのは「フローレス」というクラリティ（透明度）が最高のものだった。条件次第では、当時1カラット200万円もする。日本の宝石商でも手にしたことがないというほどのフローレスにこだわったのは、私が後発の業界参入者だったからだ。やはり既存の業者と同じことをしてはいけない。これは、後のハルナビレッジ創業の頃も同様だ。

フローレスを持って、旧知の病院を回った。すると、医師の奥様方に大変喜ばれた。7、8人連れてニューヨークツアーに行ったこともある。現地販売会だ。収益をもたらしたことで、電動車椅子の研究開発が進んだ。開発費用は1億数千万円にまで膨らんでいた。

■皇太子ご夫妻に電動車椅子を披露、米国展示会でも好評

試行錯誤の研究開発により、無事安全テストもクリアして2年半をかけ、遂にデモ機が完成した。

国際福祉機器展が池袋で行われ、電動車椅子を出展した。今上上皇、上皇后夫妻（当時は皇太子夫妻）が会場をご訪問され、興味を示された。私は音声による操作を実演すると、「多くの方の支えになりますから、ぜひ販売なさってくださいね」と激励の言葉をかけてくださった。た。

ヨーロッパやアメリカにデモ機を持っていくと、思いの外、反響があった。アメリカの展示会ではテレビ中継されたほどだ。

改善点も見つかった。日本人に比べ、欧米人は体が大きい。加えて肥満の人が多し。車椅子に座れない人までいる。大型化するには設計から見直さなければならなかった。

電動車椅子は、当時の値段で1台80万円する。福祉事務所の予算は1台当たり30万円といったところだろう。とても手が出ない。だからアメリカを中心に輸出することになった。それでも「高い」と苦言を呈された。

電動車いす安全普及協会の「電動車いす 国内出荷台数」調査によれば、1985（昭和60）年に3400台、2012（平成24）年にピークを迎え3万5717台。2021（令和3）年現在は、1万9134台とピーク時の半分弱となっている。だが、これでもここ数年は持ち直しているようだ。理由としては自動車運転免許の自主返納の影響が大きいと言われている。

さらなる量産と部品の見直しのため、新たな資金源が必要だ。私はダイヤモンドの他に翡翠にも目を向けた。

翡翠はミャンマーが世界有数の産出国であった。鮮やかでありながら深みのある緑は、日本人にも受けがいい。

当時のミャンマーは内戦により、日本へ逃れてくる人たちもいた。私はミャンマー人の若者を世話していたこともあった。その彼が、友人の親だということで、当時の在日大使を紹介してくれた。何とも不思議な縁である。

大使はミャンマーの鉱山担当大臣へ紹介状を書いてくれた。私はミャンマーへと旅立った。大臣はすぐに会ってくれ、私に翡翠加工品の取引を認可してくれた。これで一息つけると思っ

た矢先、大変な出来事が起きた。

■前日会ったばかりの友人医師の心中事件

振り返ると、人生において反省すべきことは多い。その一つが車椅子事業だ。私はこだわりすぎていたのかもしれない。友人医師のことを思い出すと、いまだに胸が塞ぐ。

その日、私は大阪府にある病院の院長とディナーを取っていた。彼とは親しくなっており、ご家族のことも知っていた。病院に医療機器をリースしていた。

今思えば、彼の顔色は優れなかった。経営難という噂を耳にもしていた。だが、ディナーのときには、そういう話は一切出なかった。

私は東京に帰るため、最終の新幹線に乗り込んだ。翌朝になってテレビをつけたら、ニュースが流れている。

「大阪府内の病院の院長が妻と子どもを殺害し、自殺しました」

驚いたなんてものではない。前夜、ディナーを共にした友人医師のことであった。

私は慌てて、事の対応に及んだ。彼の病院にはリースしていた健康診断車の3台分、計1億円の未入金があった。

さらに不幸は続く。埼玉県内の病院が倒産した。これは大口顧客であった。1年ちょっとの間に3軒の病院が倒産してしまった。リース会社への補償額は4億円近くに上る。

亡くなった医師と犠牲になったご家族には申し訳ないが、悲しみに暮れている余裕がなかった。

#### ■負債4億円の返済、一人の再出発

借金4億円。あまりに大きな金額だった。すべてを失った。絶望する気持ちがないはずがなからう。だが、立ち止まっているわけにはいかない。

まず私は定期預金2億5000万円をすべて返済に充てた。白金台のマンションも売却した。

次に、電動車椅子の開発権利をアメリカの福祉機器メーカーに売った。価格は5000万円である。あれだけの情熱をかけたのに、あっさり手放さなくてはならなかった。悔しい思いだった。演劇の世界から道半ばで退き、またこうして情熱を奪われたのだ。

残りの負債のうち2000万円は私の個人返済として、金融機関と交渉し、認めてもらえた。当然、これまでのように会社は続けられない。その頃、10人ほど従業員がいたが、彼らの

再就職を斡旋し、いよいよ私は一人となった。

そうになると、私の頭の霧が少しずつ晴れてきた。場面が転換したのだ。演劇も人生も同様だ。悲劇もあれば喜劇もある。どちらだけということはない。

再出発。

この文字が私の頭に刻まれた。

ダイヤモンドと翡翠、とにかくそのときの私には、これらしか残っていなかった。フロレスの価格は2倍に高騰していたため、個人で購入するには無理があった。百貨店に話を持ちかけ、アメリカの宝石デザイナーとの商談会を開催する事業に着手した。

また、加工品を売り続けることに飽きてもいた。卸しをやるうと思いつき、ダイヤモンドの原石を求めてアフリカへと渡った。その原石をニューヨークの加工業者に売るわけだ。

翡翠は政府以外のルートを開拓することを考えた。ミャンマー政府は加工品取引は認めていたが、原石の売買は認めていなかったからだ。

カチンというミャンマー北部は、国境を中国と接していた。第二次世界大戦中に起こったビルマの戦いの場としても知られる。カチン族はミャンマーの軍事政権と翡翠の利権を争っており、中国国境から原石を輸出していたのだ。

私は中国・昆明から自動車で20時間もかけ、この国境地帯へと足を運んだ。ミャンマー人の知人の助けて、原石を買い付けることができた。

借金返済のためとはいえ、よくも危険な橋を渡ったものだ。私はその頃、50代半ばとなっていた。心身ともに過酷であった。それでも、中間手数料が乗っていない取引を行うため、足繁くミャンマーと中国の国境に行かざるを得なかった。

#### ■水ビジネス、ハルナビレッジの萌芽

ひたすら働いた。いや、体を動かしたといった方が正しいだろう。とにかく世界を飛び回った。その甲斐あって、借金の返済にメドが立った。ようやく一息つける。心底思ったものだ。同時に、このまま人生が終わっていいものか、と考えるようになった。演劇の夢が潰え、電動車椅子の夢も途絶えた。借金返済と家族を養うための人生となりつつあった私は、還暦目前となっていた。

そんななか、1990年に合弁会社を設立した。ある知人に、飲料用の果汁を日本に輸入できないかという相談を受けたためだ。

当時、オーストリアではジュース用のリンゴの生産が盛んだった。日本で食べるリンゴよ

り一回り小さく、甘味は弱めで酸味が強い品種だった。この果汁を輸入することにした。

この際、私は日本国内の飲料メーカーに営業に赴いた。これは数年後のハルナビレッジ設立時の営業活動の布石とも言えた。

ヨーロッパに長くいると、改めて日本の水はおいしい、と感じた。ヨーロッパの水はアルカリ性が強く、また、白いカルシウムが沈殿している。そのため、ヨーロッパの人たちは生水（水道水）を飲むことはない。彼らは「蒸留水」と言っていた。あくまでお茶に注ぐものであった。それに、彼らはワインばかり飲んでいる。

その他の地域はというと、北米はおいしかった。だが、南米やアジアはおいしいとは感じなかった。

ロンドンにいた際、友人とともにある工場を見学したことがあった。そこは地下水を汲み上げてペットボトルに詰めるミネラルウォーターの工場だった。ヨーロッパの水を見直すくらい、その水は本当に美味しかった。

人里離れた田舎の森、こぢんまりとした工場であった。主は得意げに言った。

「人があまり住んでいないから排水が地下に染み入らない。だから地下水が美味しんだよ」  
水を売る。それまで発想になかった。だが、これだけ美味しい水であれば売れるのかもしれない。



れない。日本の水は、もつとうまいはずだ。

地球上でまともに水が飲める場所というのは、実に少ない。日本は資源が少ない国と言われるが、水に関していえば恵まれている。

まだ私の人生は終わっていない。夢の続きを見よう。近代細菌学の祖であるルイ・パスツールは、情熱のことを「内なる神」と言った。情熱は尽きない、命が続く限り。まだぼんやりとしてはいたが、私は水に身を任せることにした。1993年、私は60歳になっていた。

#### ■両親の死、兄との雪解けの季節

第二幕の時期というのは、私の30代から50代終わりまでである。この間に、2人の息子が誕生し、それぞれ個性的な進路を歩んでいった。

かたや両親と兄、それぞれとの時間があつた。だが、私はこの時期、家族を顧みるには、あまりに動きすぎていた。単純に日本にいないことが多かったとも言える。

母は父と離婚したあと、郷里の山口県で暮らしていた。出たり入ったりはしていただろうが、静かな生活であつたと思う。かたや父は二度再婚している。

私が肺を患い入院中、サナトリウムに見舞いに来てくれたことが何度かあったが、その後、私はニューヨークに行ったりドイツに滞在したり、と日本を離れていることが多く、母と会う機会は減っていた。

母は私のよき理解者だった。演劇に夢中だった私のことをよく見ていた。だから、私には相談していたのだ。将来医者にはならないよ、と。父と兄との確執のとき、母は私の夢を実現させようと協力してくれた。

早稲田大学の受験票をもらってきたのは母だった。

「とにかく試験だけでも受けてみなさい」

「受けるといっても、あの二人に反対されるから無理だよ」

「いいから受けていらっしやい」

気が乗らないままに受け、演劇科に合格したのは先述の通りだ。

合格後、下北沢の狭い部屋に住むとき、保証人になってくれたのも母だった。啖血して山口から飛んできてくれたのも母だった。

私が健康だったら、里に帰さず、一緒に暮らそうと思っていた。本当に母には悪いことをした。

母は白血病を患っていた。手の施しようがなく、医師には半年の命だと宣告された。私はずっと側にいた。母は医師の宣告通り、半年後に亡くなった。まだ50代だった。

父はよく酒を飲んでた。庇うわけではないのだが、父には酒を飲む理由があった。それが弟・三生の死だった。父は弟を大変可愛がっていた。先にも書いたように、父は小児科であるのに、自らの子の命を救えなかった。これを機に子どもを診ることをしなくなった。もしも、ということ言うならば、三生が生きていたら、両親は離婚しなかったかもしれない。父との関係は修復されていたように思う。父は生涯にわたって、ずっと医師として勤めた。本書の冒頭に何枚か白衣姿の父の写真が収められている。父は、島々の小さな村に診療に出かけていたのだ。それを朝日新聞が取材したときの写真である。父は、実に真摯な医師だった。私は父と諍いはあったが、尊敬している。

父は本当に釣りが好きだった。島へ診療に行くには船に乗らないとならない。そのとき、必ず釣竿を持っていった。

晩年は埼玉にある友人の病院の手伝いをしていた。その病院で父は70代で亡くなった。

慶應大学の医学部を受ける受けなくて揉めた兄とは、少しずつだが雪解けの季節を迎えていた。

兄は大変な頑固者だった。私は母のことが好きだったが、兄は父のことが好きだった。父のために、という気持ちが強かったと思う。

兄は医学研究の道に進み、大学で教えてもいたが、実は元は小説家志望だった。私は読んだことがあったのだが、とてもいい小説だった。その頃はまだ、本人は小説家になるつもりだったようだ。

兄弟のうち兄は小説家、弟は演出家。本来なら、父の病院を継ぐどころの話ではなかったのだ。

父が亡くなったとき、兄から電話がかかってきた。

「親父が死んだから、病院に引き取りに行くぞ」

私と兄は霊柩車を借り、遺体を引き取りにいった。私が運転し、兄が助手席に座る。なんとも言葉に言いようがない出来事だった。だが、私は父に大変良いことをしたと思っっている。唯一、私と兄が揃って父にできた孝行であった。

兄は数年前に亡くなったが、完全に和解しきれたとはいえない。義理の姉（兄の妻）とは

今でも仲がいい。それがせめてもの私の兄孝行である。

## 第三幕 水とともに、ただ流れゆく

——ハルナグループの創立と今

### 第1章 一滴の水を追って

#### ■反対の声を押し切って水ビジネスへ

ロンドン郊外で水ビジネスのヒントを得た私は、早速動き始めた。動けば、様々な未練が断ち切れる気がした。迷いはなかった。

だが、周囲は反対の嵐だった。家族、友人、知人、誰にでも構想を話すと、こぞって「やめておけ」と言う。

「もう定年じゃないか、ゆつくりしたらどうだ」

「製造業もやったことないのに、いくらなんでも無茶すぎる」

その都度、私は、

「年齢は関係ない。やろうと思えば立ったのが、たまたま還暦に過ぎないんだよ」

と告げた。

当時の経済状況も、反対の後押しとなっていた。バブルが崩壊した以降の日本経済は惨憺たる状況であり、残念ながら現在も変わらない。人によっては「失われた30年」とさえ表現する。大企業は工場設備を海外へ移行し始め、デフレの始まりの時期でもあった。

だが、私は一蹴した。飲料業界の成長率だけを見れば、当時この業界は年3・5%の成長を続けていた。殊にアメリカの成長が顕著で、日本はそれに引っ張られる形であった。国内人口もわずかながら増えていた。いずれ人口が減少していくことは統計を見れば明らかであったが、まだ十数年は大丈夫だろうと見ていた。

飲料と食品は、必ず需要がある。人間に限らず、あらゆる生物は飲み食いしなければ生きていけない。しかも、人間は飽きっぽい。嗜好がころころ変わる。その頃は、茶系飲料やさっぱりした味わいのドリンクがヒットしていた。商品開発によっては新規参入も可能だ。

一方で、飲料はいつの時代になっても主力は「水」と「茶」だ。それだけ競争が激化しているともいえる。

参考までに2020年の「飲料ブランド別・販売ランキングTOP15」（「売れ筋飲料『水・コーヒー・茶系』が上位独占する訳」、「東洋経済」2021年9月21日）を見ると、1位

の「サントリー天然水」をはじめ水系は3銘柄、4位の「お〜いお茶」をはじめ茶系は5銘柄が入っている。

### ■未踏の地・群馬へ降り立つ ハルナビバレッジ創業

1994年春のことだった。

関東圏で水脈が豊富な地をリサーチした。物流のことを考えると、関東圏内（埼玉、千葉、栃木、群馬）で起業することが自分に課した条件であった。何箇所か絞り、自ら視察へ赴いた。そのうちの一つが群馬県であった。

水売る狙いとして産地を表に出すことを考えていた。結果的に私の場合「谷川岳」ということになるのだが、単純にいいそうな水が湧いているイメージがないだろうか。おそらく産地を表に出せば、消費者の目を引くという予感があった。

新幹線に乗り、高崎駅で降車する。初めて足を踏んだ地であった。どことなく風が心地いい。「さあ、どこに行こうか」

本当に、気ままな旅の心境であった。とにかく群馬の知人もいなければ、飲料に関する知識や経験は皆無に等しかった。反対に言えば、何も知らないから奇妙なプライドもない。誰



かに聞いてみる。聞くことに何の躊躇いも恥もなかった。

駅構内の観光案内所に入り、係の方に飲料工場がないかを伺った。自分でも電話帳を調べると、思いのほか少ない印象だった。そのうちの1軒に電話してみると、私の話に興味を持ってくれた。

「今からいらつしやい」

人のいい方で、私はお言葉に甘えて早速出向いてみた。工場長のお父さんが出迎え、門外漢の私の話を丁寧に聞いてくれた。話しているうちに、もう使っていない工場敷地があるという。

「では、私に使わせてください」

「いいですよ」

信じられないだろうが、群馬の地で創業することがあれよあれよと決まってしまった。偶然訪れた場所で、何の迷いもなく即断してしまったのは、理屈では語りきれないものを感じる。

実際はその後、紆余曲折はあったものの、合意に至った。群馬は、水質はもちろん水量も豊富だ。群馬・榛名の地で、私の新たな夢が始まった。

1996年2月23日、ハルナビレッジが設立された。

■ 缶からペットボトルへ 勝機をつかむために

普段、ペットボトル容器で飲料を飲む人が多いことだろう。ここ数年はSDGsの観点からプラスチック容器に対する意識が、世界中で変わりつつある。飲料メーカーに求められるのは、新たなイノベーションであることは間違いない。その観点からすると、ハルナビバレッジの創業期も正に同様であった。

1990年代中頃、飲料容器といえば缶だった。シェアは70%弱、他は紙や瓶であった。ペットボトルはまだまだ浸透しきっていなかった。流通していたとしても、1.5リットルや2リットルの大型ペットボトルであった。意外かもしれないが、その頃はまだ500ミリリットルのペットボトル容器は存在していなかったのだ。

理由は環境問題への懸念だった。先ほど触れたように、ペットボトル容器は環境問題と密接に関わる。小型容器は大型容器に比べ、流通が膨大となる。いくらリサイクルするとはいえ、様々な環境負荷は拭えない。業界の中で自粛ムードがあったのだ。

かたや海外では、小型ペットボトルは普通に使用されていた。輸入品では500ミリリットル容器はよく見かけていた。実際、販売も伸びていた。大型容器と異なり、小型容器は持

ち運びに便利だ。缶では途中で封することができないが、ペットボトルにはキャップが付いている。ニーズも高まっていた。

私はここに狙いを定めていた。おそらく自粛解禁は近い。ならば、缶飲料の製造より、いきなり小型ペットボトルで勝負した方がいいだろう。

私はイタリアから小型ペットボトル用の設備を輸入し（この設備はトラブル続きで苦労させられた）、工場稼働に向けて動き始めていた。

#### ■演劇的経営とは何か

60代を迎え、私の心は奮い立ってはいたものの、冷静に物事を判断する気構えができるようになっていた。思い立ったら健康度外視で動いた20代、世界を飛び回り危ない橋を渡り続けた30～50代、きつと経験と判断力が自ずと培われていたのだろう。

その頃の私は、演劇に対する思いを再燃させていた。60代を迎えるに当たり、一般の人々と同様、定年という気持ちが無かったわけではない。ゆっくり演劇を観たり、演出のことを考えたりする日々を夢想しなかったと言ったら嘘になる。

だが、私はハルナビレッジを創り、走り出していた。そうだ。会社経営も演劇と同じで

はないか。若い頃、演出家を志していた私は、一度冷静になって考えてみた。

繰り返すが、飲料業界や群馬の地に対する知識に疎く、知人も縁故もない。演劇は演出家だけでは成り立たない。演者もいれば裏方もいる。さらに観衆もいる。演劇において観衆がいるのといないのでは大違いだ。演劇から観衆は切っても切り離せない、一体のものだ。私はハルナビバレッジの経営理念を以下のように定めた。

顧客志向を経営の核として

顧客評価に値する品質とは何かを問い

顧客思考を超える製造とは何かを考え

顧客歓喜の果実を己の収穫とする

私はのちに「演劇的経営」と、自身の経営方法をそう定めた。経営者≡演出家、従業員≡演者やスタッフ、顧客（消費者や取引先など）≡観衆。皆が一体となって経営を行う。私は、ハルナビバレッジを舞台と見立て、演出家として動く。

そのために、まず何が必要か。演者、つまり人財である。

■様々な経歴の人財が集う

新しく起業したと知人に伝えたら、ぜひ息子を、と言ってくれた人がいた。20代前半の青年だった。彼と会ってみたら人柄もいし能力もありそうだった。早速、営業を務めてもらうことになった。縁とは不思議なもので、彼はのちに2代目の社長となる。

新聞広告でも求人を行った。すると様々な人財が集まった。飲料メーカーの工場長を務めていた方、管理職だった方など、製造のプロたちが働いてくれることになった。その後もそうであったが、私は採用の際、必ず自分で面接を行った。このとき採用した経理の女性社員は、現在も活躍してくれている。本当の「生え抜き」である。

そして、地元群馬の顔利きともいえる方々にも参画してもらった。彼らは金融機関出身だから、とにかくいろいろな人を知っているので、どんどん紹介してもらえた。

私は彼らを「7人衆」と呼んだ。彼らがそれぞれの役をハルナビレッジという舞台で演じていく。7人衆は創業の最大の功労者である。彼らなくして、今のハルナグループはない。彼らは自らの役割をしっかり理解していた。スタニスラフスキー・システムではないが、彼らは自身で考え、想像する力を持っていた。正に即戦力であった。

その後も、現在のハルナグループの経営を司る人財が集まってきた。皆、まだ20代の若者であった。そのうちの一人には、私は当初から、

「君は将来の社長だ」

と言いついてきた。

当人はきよとんとした顔をしていたが、彼は実際事業会社の社長を務めることになった。これも演出の一つと言ってもいいのかもしれない。彼は自分が将来、この会社の経営トップになるんだということを日常の業務の中で、漠然と感じていたことだろう。役が人を育てることもあるのだ。

#### ■顧客づくりと工場建設 観客と舞台を整える

次に顧客、つまり観客を招かないとならない。

飲料メーカーとしては、もちろん後発である。そうである以上、他社とは異なる「売り」がなければならぬ。先に触れた小型ペットボトル、これが何と言っても最大の売りであった。

第二幕の後半に、以前オーストリアのリングを使ったジュースを輸出する企業を興したという話に触れた。そのとき、飲料関連企業の営業をしたことがあったのだが、その経験が大

いに活きた。もちろん、電動車椅子やダイヤモンドなどの営業スキルも役に立った。

早速、工場や機械の図面などを持って回ると、大手飲料企業が乗り気になってくれた。いわゆる委託生産、のちにこれはプライベートブランド（PB）事業へとつながっていく。

徐々に観客は集まりだした。何やらおもしろい舞台が始まるぞ。そういう期待感を持ってくれたことだろう。演劇で喩えるならば、私は演出家兼俳優、しかも主役を演じていたことになる。

私がハルナビレッジを興した中で、ハイライトの一つであるのが、工場建設だろう。第1工場を造るや否や、創業から数年の間に、第2、第3工場と次々投資していったのだ。

その頃は、銀行の融資が下りやすい社会環境であったといえよう。バブル崩壊により、土地神話が崩れた。不動産重視の融資ではなく、事業計画自体に重きを置いた融資をしようという流れになっていたのだ。

のちの話になるが、第3工場設立の際は、それでも金融機関は融資に難色を示した。ところが幸運なことに、とある経済誌の成長度格付けランキングで全国2位となり、風向きが変わった。中には、

「群馬県内にこのような有望企業があるのは知りませんでした」

と言う融資担当者もいた。

この特集記事は本当にありがたかった。融資の相談が向こうから、どんどん舞い込んだのだ。計画通り、第3工場まで創設することができた。

しかし、裏話ではないが、このときも周囲は哑然としていた。7人衆に限らず、若い従業員たちも、

「なぜ工場建設を急ぐのですか」

と、口を揃えて危惧した。

本音をいえば、かなり無理をしていたが、もちろん先を読んでの投資であった。私は、何かを為すときには、社会、世の中の流れというものをしっかり見ることが大事だと考えている。それが経験というものだ。やりたいからやる。その情熱は必要だ。しかし、年齢を気にしないといっても、私はもう60歳を過ぎていた。闇雲に動くわけにはいかない。

そのとき、こう考えていた。日本国内の消費は人口ピークに伴い、確実に減少する。少子高齢化の社会は、市場までも激変させる。先にも述べたが、まだ当時飲料業界は成長産業といえた。だが、時代はすぐにシフトする。



市場が成熟し、変化を迎えてから動くのでは遅すぎる。ならば、事前に投資を行い、どんな変化にも対応できるような体制を整えることを最優先したのだ。

加えて、顧客のニーズに何としても応えたかった。一口に「コーヒー」といっても、無糖ブラックもあれば砂糖入り、ミルク入りもある。同じ砂糖が入っていても微糖もある。飲料は実にニーズが細かいのだ。それに真摯に応えるためにも工場設備は必要であった。

#### ■工場フル稼働 「桃の天然水」の大ヒット

創業当時は、生産委託が中心となる事業内容だった。サッポロビール、JT、カゴメ、味の素、ダイドードリンコといった大手企業の飲料の生産委託を受け、PBなどにも携わっていた。ウーロン茶などの茶系飲料がメインだったが、最大のヒット飲料というとJTの「桃の天然水」（以下「桃天」）である。

桃天は、元は缶飲料であった。「ニアウォーター」という触れ込みである。1996年に発売されたが鳴かず飛ばず、知名度も低い。そこで「小型ペットボトルで販売してみませんか」と営業をかけ、翌年から小型ペットボトル飲料として発売された。

ペットボトルのメリットは、中身が見えるところだ。透明度が高いため、すっきりした味

わいだということが消費者にも想像しやすかったのだろう。また、1998年から当時人気だった歌手・華原朋美さんによるテレビコマーシャルが流れた。「ビュービュー」というフレーズは若い方の耳にも留まり、注文がどんどん増えていく。

当時のJTの担当者は、こう語っている。

鮮度感あるパッケージデザインと桃の果汁飲料では過去にない透明な中身・キレのある香味がペットボトルという容器によってうまく表現でき、積極的なTV広告の後押しによって爆発的なヒットにつながった。（須齋嵩『はじめなければはじまらない』）

第2工場は「桃天専用」となりフル稼働、桃の爽やかで甘みのある匂いが常に漂っていた。これほど営業が楽な商品はなかった。営業しなくとも注文が入ってくるのだから。年間1600万ケースも売り上げた。他社からも桃の飲料は販売されていた。差別化ということであれば、桃天は桃の味を前面に出すというよりも、桃の爽やかさを感じさせるということにあったと思う。

残念ながら、その後、JTは2015年に飲料事業から撤退し、桃天も市場から消えた（そ

の後、復活した時期もある)。

間違いなく創業期のハルナビレτζを支えた製品である。想定外のペースで成長することができたのもそうだが、この経験によって、品質管理に対する意識が高まったからだ。

さらに私はこの成功を「土産」に、JT側に株を持ってくれないかと頼んだ。異例のことではあるが、当時の社長は認めてくれた(現在は株の持ち合いは解消)。これには銀行も驚いていた。

#### ■さらなる人財育成 四半期報告会とビジネススクール

私が自身の経営において、自負することができるとしたら、次の2点が挙げられる。まずは、四半期報告会の開催だ。

今では多くの企業が四半期報告会を行っている。ステークホルダー(株主などを含む)に對しての四半期ごとの業績報告である。私は2002年に初めて報告会を開いた。

「まだ上場もしていないのに行うのか」

「トラブルなど、マイナス面の報告までする必要があるのか」

そういった声も聞かれたが、これからの企業は透明性と企業活動への責任を明確にするこ

とが必要だと捉えていた。また、当時のハルナビレッジは大手一流と言われる企業が株主に名を連ねていたので、より明確にする必要があった。

群馬県内で四半期報告会を行っている企業は、当時珍しかった。そのためか、金融機関をはじめ、様々な企業の経理担当者などが視察に訪れた。

この場合は、実は人財育成にも役立つ。私は報告会の冒頭の挨拶はするものの、各事業に関する報告は、すべて部署の担当者に任せていた。まだ若い人たちもいる。壇上に立って発表することに慣れず、緊張している人もいた。自分が報告するということは、誰よりも部署について詳しくなければならぬ。そこに緊張感と責任感が伴ってくる。

2つ目はビジネススクールの開校だ。

第二幕で、私は若い頃、津田塾大学のビジネススクールに通っていたという話に触れた。あの頃、私は経済のことなど、まったく分かっていなかった。あそこに通っていたおかげで、様々なことを学んだ。そのときの印象が強く頭に残っていた。

2005年にビジネススクールを開いたのは、従業員が150人以上に増えていたことも理由である。そろそろ次世代の人財を育てていかないといけない時期ともいえた。

現在、ビジネススクールは「経営者養成コース」や「プロフェッショナルコース」などがあり、毎月1度開催される。自社に限らず、大学教授や企業の役員などを招聘し、講義をしていたり、講義を受けることもある。花王の元代表取締役社長の常盤文克氏、経済評論家の財部誠一氏、私の古くからの友人で、丸紅子会社の元社長を務めた森田茂も登壇してくれた（森田は中学の演劇時代の同級生で、定年後に老人介護ホームなどをボランティアとして回り、お笑い<sup>①</sup>を届けている）。

2022年現在、開校から受講者は延べ3万人を超えている。ここから確実に将来のリーダー、リーダー候補が生まれている。

#### ■経営難の会社を合併・買収により従業員増

経営難の会社があるから買収していただけないか、という話があったのは2007年のことだった。

この会社はJRのミネラルウォーターの受託生産をしていた（2022年5月に専用の工場が新設された。この縁がなければ叶わなかったことだ）。従業員が多く、工場などの設備が老朽化しており、悩んだ挙句、引き受けることにした。2013年には和歌山の工場も買

収した。

従業員の数は400人を超えた。私は自発的な退職以外の雇用はすべて守った。確かに人件費の過多は経営圧迫の要因となるが、プラスに捉えた。経験を多く積んだ人財が加わったのだ、と。

同時に、分社化という組織改革にも乗り出していた。生産、販売、営業、物流と事業会社を分け、育ってきた人財にそれぞれ役員に就いてもらった。まだその頃は、先に登場した7人衆は健在だった。彼らが「第1世代」だとしたら、このとき役員に就任したのが「第2世代」、そして、様々な部署でリーダーを務めるのが「第3世代」と言えよう。

ハルナグループという劇団は、ベテランから若手まで、バランスのとれた人財が揃いつつあった。売上高も100億円を超えていた。

気がつけば、ハルナビレッジを創業して10年が経っている。私は、そろそろトップの座を譲ってもいいのではないか、と考え始めていた。

#### ■息子たちの入社、バトンタッチへ

先にその後の話をしてしまうと、私は2020年に代表権を持つ会長職を退いた。

2022年現在、私の肩書は「名誉会長」である。ほとんど会社に顔を見せることはない。2020年まではほぼ毎日のように会社に出向いていたが、実質の経営は次代に譲っていたといっている。私は多くを口出ししてきたわけではない。

時間を元に戻そう。2006年、創立から10年が経ち、私は社長職を譲った。2代目社長は、かつてハルナビバレッジ創業まもなく私と営業回りをしていた青年である。彼は、自身の会計事務所を開きたいという夢を持っており、会計士になる勉強も続けていた。2009年まで社長を務め、独立し、現在もハルナグループを社外から温かく、時には厳しく見守ってくれている。

時を同じくして、私の二人の息子がハルナグループに入社している。彼らはそれぞれ別の貿易会社に勤めていたが、相次いで倒産してしまった。ハルナグループで働きたい、と言ってきたので、私は彼らを営業からスタートさせた。

そして、長男が3代目社長に就任し現在に至っている。次男は事業会社の社長を務め、現在は海外に赴任している。

■アジア、ヨーロッパを視野に “飲料のプロデューサー”

経営に関していえば、人それぞれのやり方があり、何が正解で不正解かはわからない。時代や社会状況、業界、企業によって様々である。

家族だからといって考え方が同じではないのは、私や父、兄を見ても容易にわかることだ。父は病院を経営し医師となった。兄は病院勤めはしたくないけれども医学研究の道を進んだ。そして、私は演出家を目指しながらも夢半ばで終わり、飲料企業を立ち上げた。それぞれが生きる道があった。

息子にしても同様である。長男は彼なりの経営手段を取ることにした。礎を築かれたのち、時代の要請もあって、ハルナグループは海外、主にアジアとヨーロッパを視野に入れていた。しかし、ただ飲料製品を輸出するだけでは、他の企業と変わりない。ハルナグループが志すのは、飲料のプロデューサーという役割である。各地域に根ざした、また、各地域の人々の生活に合った飲料をプロデュースする。例えば、茶系飲料であれば、日本人が好むような茶葉の濃さを感じられるものではなく、フレーバーの効いた味わいのもの。

反対に海外の飲料（スムージーなど）を輸入し、日本で販売することも行っている。スイカ味の飲料は数年前に日本でもヒットした。このときはSNSが大いに役立った。



今では海外事業は次男が主に担っている。彼は高校、大学と海外で暮らし、語学も堪能だ。自ずと、海外暮らしが性に合っているのだろう。年に数回も顔を合わすことはないが、それは昔から変わらない。彼は彼なりの人生を選んだのだから、私は口を出しはしない。

#### ■ハルナグループからの引退

あまり数字のことを言うのは、私は好きではない。会社の本質や魅力を語るのに、数字だけではできないからだ。だから、あくまで情報として捉えておいてほしい。

2022年3月現在、ハルナグループの連結売上高は250億円を超え、従業員は500人を超えている。現在は、ハルナビバレッジをホールディングカンパニーに据え、商品開発や営業などを担うハルナプロデュース、海外事業を担うHARUNA、アジアマーケットを担うHARUNA Asia、そして研究を行っているウエルネスサイエンス研究所といったグループ組織となっている。

先に述べたように、私は2020年にハルナグループの経営からは引退した。長男や次男の他に、生え抜きの人財も着実に育った。もう私が口を出すこともない。それに、私がいつまでも社内をうろうろしていたら、皆が落ち着かないだろう。

私の役目が終わった。そう思ったところもあるが、私にはまだやり残したことがあったのだ。

### ■ 榛名美術を創設、美術館を始める

ハルナグループに関する業務から完全に離れたのは、2020年のことだった。代表権の外れた「名誉会長」という肩書きは残るものの、週に一度も会社に顔を出すこともしなくなつた。

同時に、私は長年構想していた美術館を開くことを思い立った。2020年4月に「一般財団法人榛名美術」を高崎に創立した。かつて私が居住した榛名山にほど近い建物を「絵画の館」とし、広い庭園を「彫刻の杜」とした。

春になれば桜が、秋になれば紅葉が迎えてくれる。都会とはまったく異なる静かな自然環境に身を置き、美術作品に囲まれる生活が中心となった。

昔からピカソの絵が好きだった。20年くらいかけ、こつこつとオークションに参加しては、ピカソの作品を蒐集するようになっていた。

そのうち、ピカソ以外の美術家たちの作品も集めた。すると、知人が「せっかかない作品を蒐集しているのだから観られる施設があればいいのに」ということを言った。そのことが

ずっと頭に残っていた。ハルナグループの経営から身を引くタイミングで、榛名美術を創設することになったのだ。

加えて、私は彫刻、殊に古代ギリシア時代の作品が好きだった。せっかくだからギリシア神話に基づいた彫刻作品を作ってみるのもおもしろい。そこで、同郷の後輩でもあった彫刻家の高濱英俊さんと知り合ったきっかけで、彼に制作を依頼するようになった。

2022年12月までに、春・秋と開催する企画展は3回開くことができた。「2022秋の企画展」では、ささやかではあるが、レセプションを開催した。コロナ禍でなかなか華々しいイベントができないなか、地域の方々を含めた来場者に飲食を振る舞い、楽しい時間を過ごすことが叶った。当日は晴天で、榛名山に近い場所だというのに50名ほどの人たちが集まってくれた。

榛名美術は、2023年3月末をもって解散することになったが、以後は榛名記念の家の下、運営されている。

■はじめたら、おわりはない

2026年、ハルナグループは創立30年を迎える。つい最近25年を迎えたばかりであった

が、もう目前にある。おそらくこのまま順調に行けば、無事に30年を迎えることができるだろう。

私は常々口に出している言葉がある。

「はじめたら、おわりはない」

これは、フリードリヒ・ニーチェの言葉に端を発している。

いつかは死ぬのだから、死ぬのは決まっているのだから、ほがらかにやっつていこう。いつかは終わるのだから、全力で向かっていこう。時間は限られているのだから。チャンスはいつも今だ。嘆きわめくことなんか、オペラの役者にまかせておけ。（『超訳 ニーチェの言葉』）

力への意思が漲っている言葉である。

ハルナグループがここまで続けることができたのは、利潤を追い求めてきたからではない。事業、つまり、何をやるのか、何をして顧客の支持を得られるのかを常に考えてきたからだ。

私は100年のことを「四分の四世紀」と表現することがある。今、ハルナグループは四

分の一世紀を終えたばかりだ。次の四分の二世紀を迎えるにあたり、社会環境や経済状況は、これまで通りとはいかないだろう。

残念ながら、私はその時間を見守ることはできない。飲料業界でいえば、30年というのは決して長い歴史ではない。だが、個人にとって30年というのは長い時間でもあるし、企業人であればベテランでもある。

するとプライドというものが生まれてくる。だが、プライドだけでは強さにはつながらない。時代を常に見据え、時に適応したり変化することが必要となってくる。そのとき、プライドは邪魔をするかもしれない。続けていくためには、変化しなければならない。従業員一同には念頭に置いておいてほしい。

## 第2章 今、何を想う

私は機会があるごとに、様々なメディアや媒体を通し、自らの哲学、考え、意見などを発表してきた。日刊工業新聞の井水治博社長とは通算11度の紙面対談を行い、国際社会、環境、経営、歴史、様々なテーマについて語り合った。

第三幕第2章では、私が今、何を想い生きているのか。簡単ではあるが、意見を述べさせてもらおう。

### ■日本人とは何か

とかく日本人といった民族や国籍に囚われがちであると思うが、集合体としてというより個人として、自分はどういう人間なのかということをもっと考えた方がいいのではないだろうか。その上で「日本人とは何か」という問いに対して、一人ひとり向き合っていく。順序が異なっている気がする。

日本人とは、と考えたとき、例えば中国人とは何か、という比較が生じてくる。そこで初

めて日本人であることを自覚させられる。

ただ、何度も言うが、私個人としては日本人であるのかないのか、ということはどうでもいいことだ。無国籍のつもりで生きてきたからだ。生まれた国、育った国によって、個人を判断することに意味はない。そう簡単に「日本人です」と私は言えない。

あくまで一人の人間は個人である。私の場合、生まれたのがたまたま中国・北京であった。周囲にいた人たちがたまたま中国人だった。それだけのことに過ぎない。幼少の頃から、中国人だから遊ばない、日本人だから遊ぶ、ということもしてこなかった。

ただ、あえてここで日本人ということ振り返ったとき、私の幼少の頃と現代の日本人に大きな違いはないと感じる。やはり日本人はいつだって日本人なのだ。恥ずかしがり屋で遠慮がち、自己主張しない（あるいは主張がない）。加えて、日本人であることを必死で守っている。

多くの人が感じている日本人像かもしれないが、時代が変わろうともそれは変わらない。習慣性というもので見たとき、日本人は変わっていない。それを善悪で捉えることに意味はない。やはり個人、一人ひとりが考えていけばいいことではないだろうか。

## ■自由であるということ

役所などの手続きで、ふと自身の住所などを見ると「縛られているな」という感情が芽生えてくる。真に自由ではないな、と。究極的なことでいえば、死ぬことでしか、その痕跡を消すことはできない。

これまでの人生において、私はあまり自分はこの人間として見られたいという意識を持ってこなかった。なぜなら、他の人が自分をどう捉えるかは自由であるし、強制することなどできないからだ。ならば、ありのままの自分を見てもらおう、自由でいいではないかと考えていた。

「あの人はこういう性格だ」といった分析にも関心がない。そういう風に決めつけたり、性格の判断によって人間関係を築いてきたこともない。もちろん、話していて楽しいといったことで交際することはある。だが、それは私の嗜好の問題だ。相手の性格や思想とは関係がない。だから誰かを性格で判断し、ましてや否定することもない。

ニューヨークの劇団で学んでいたとき、「君はこの国の人間かい」と聞かれたことはなかった。アメリカという国が人種の坩堝であるから、誰がどこの国の人間であろうと気にしないのだろう。見ているのはあくまで個人。言うならば、「君は何者なのだ」ということである。



■覇権を握り続ける中国という国家

中国は時代に合わせて巧みに変化することができる国家だ。近い将来、アメリカを凌駕すると言われているが、その通りになると見ている。アメリカは過去の国、中国は未来の国と言える。

国民一人ひとりの意識が国を作っていく。そういう意味での中国人の意識は、日本人はもちろんアメリカ人よりも高い。それは、中国が両国に比べ、後から成長していったからであり、自分たちが強く表に出ていけないといけないという宿命に駆られている。そのことがいい作用を及ぼしている。

さらに教育の差もある。中国の教育は一貫しているのだ。皆で国を盛り上げないといけないということを、彼らはよく理解している。かたやアメリカは自由を標榜している国だから、足並みは揃いにくい。

中国は政治力が強いように見えるが、東南アジアをはじめとする周辺国家とのつながりには経済力を活かしている。中国民族というよりも中華民族や華僑として彼らは香港やシンガポールを中心に、世界経済を回している。対してアメリカは政治力を使って、周辺国などを

まとめようとする。

中国は共産党一党独裁の政治体制であるが、あくまで思想的にまとまっていくための表向きの手段であろう。実際のところ、彼らの経済活動や国の内情を見ると、共産主義という感はない。むしろ自由主義といえる。国民もそのことはわかっているので、特段反対はしないし、この体制が続いてくれた方がいいと思っている。

私が演劇から身を離れ、様々なビジネスに携わったとき、自ら中国に赴くことはなかった。中国をビジネスに利用するようで嫌だったからだ。お金だけの付き合いではなく、私は真の心で交流したかった。

中国人はドライでもあり、日本人と接する際、ビジネスだからと割り切っているとところがあるだろう。現在の日本経済は中国に頼っている部分がある。過去のことには水に流せない。そのことは常に念頭に置いておくべきで、日本人は勘違いしない方がいい。大事なのは真心だ。

■過去となりつつあるアメリカとヨーロッパ

今後、アメリカは北米大陸を中心に、中南米を含めた地域から出ていかないのではないだろうか。むしろ、中南米でさえ、アメリカの力を拒否すると思われる。アメリカ大陸は一体

にならないだろうし、望んでいる人もいないだろう。

アジアへのアメリカの影響力も弱まっていく。やはり中国の力が強い。日本と韓国だけしか、アメリカは影響し得ない。しかし、地政学的に見れば、日本も韓国も中国に近い。そう考えると、アメリカへの過度の依存は不自然であり、将来、自然な姿になっていくかもしれない。

経済的にも政治的にもリーダーシップを取っていたアメリカの姿は、もう見られないだろう。自国ファーストという動きは鮮明だ。だが、アメリカの立場からしても、日本が必要ともいえる。南米はまだまだ経済力が弱いからだ。

アメリカの歴史は、1620年以降の「ピルグリム・ファーザーズ」から始まる。信仰の自由を求めたイギリスの清教徒たちが、メイフラワー号に乗ってアメリカ大陸を目指したのだ。以後、北米大陸では原住民たちとの争いが続き、遂には駆逐してしまった。

独立戦争、米墨（メキシコ）戦争、南北戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東戦争……数え上げていくとキリがない。アメリカの歴史とは戦争の歴史と言える。戦争は文明ではない。その観点から、アメリカは文明国とは言えない。

だが、現在のアメリカは「過去」になりつつある。JETROのレポート「米国勢調査の

最新結果から人口動態変化を読み解く」によると、2020年時点で人口構成のうち、57・8%を占めているのが白人で、これが最大だ。しかし、2010年と比較すると5・9ポイント減っている。一方で俄かに増えているのがヒスパニック系である。おそらく時代がさらに経つにつれ、この割合は広がっていくだろう。今後も注視する必要がある。

つまり、かつてのアメリカの姿は徐々に消え、あるいは変わっていく。白人から有色人種のルーツになっていき、宗教や文化も塗り変わっていくであろう。

経済においても、アメリカは産業国ではなくIT・金融・農業に大きく分かれていくことになるだろう。しかし、金融というのは「砂上の楼閣」に過ぎない。

ヨーロッパに目を向けてみると、案外、アメリカを同盟国だと真に捉えている国は少ない。もちろん「建前」では動くだろうが、本音は異なるだろう。ヨーロッパはEU、おそらくドイツが軸になって将来を渡っていく。だが、ドイツは英仏に対しやや遠慮がちには見える。

ロシアはあのようにウクライナに侵攻したため、ヨーロッパの混迷を深めることになる。国連も機能していない。天然ガスをはじめ、資源問題があるからヨーロッパとしては切りたくても切れない。ドイツは正にそうだ。

■ 選択をするということ

私はあまり物事を曖昧にしてこなかった。人生において、こういう風に生きたいと望むことは誰しもあるだろう。しかし、望まない壁が突如、自身の眼前に立ちはだかるときがある。私はそれを黙して受け入れる。その道が進むべき道なのだと決めているのだったなら、なおさらだ。

たとえその道が苦しくとも、辛くとも関係ない。反対に楽しいから、幸せになれるから、この道を選ぶということにもならない。あまり右往左往しない。

価値観は自身の生きていく上で、最も大切なものの一つだ。必ず道を選ぶとき、決めるとき、価値観は顔をちらつかせる。価値観というものは好みでもある。だから逆説的にいえば、自ずと進んでいる道は、自身にとって嫌な道ではないということにもなる。そのとき、自分といった新たな個人を見つけることができる。

おそらく現代社会は、日本においても個人の生き方というものが尊重され、実際誰もがそれを優先している向きがある。若い方はなおさらだろう。それは間違ったことではない。周囲を気にしないで、自身の選択をしていけばいいと思う。

大局的に物事を見たとき、日本はアメリカから真に独立する生き方を模索すべきだ。実際

に動き出した方がいいくらいだ。では、どうやってアメリカの言いなりにならず自立できるのか。その選択肢はいくつかある。

考えられるのは環太平洋各国との連携強化である。オーストラリア、ニュージーランド、あるいはシンガポールも含む。二国間の同盟ではなく、これらの国々と一体となった経済同盟を結ぶ。各国の都合を重視するのではなく、同盟としての主張を一本化していく。

また、日本がアジアの中で一国のみで生きていく選択は難しいだろう。やはり中国の存在が大きい。現状、中国が形成する中華ネットワークに日本は入っていない。アメリカと同盟関係でいる以上、アジアの中で存在感を際立たせることは困難だ。

しかし、日本が中国との関係を強めることにアメリカはいい顔をしない。日本は板挟みにあると言える。そこから脱却するためには、先に挙げたように環太平洋各国との連携も必要になってくる。孤立した姿であることは、ニッチもサッチも行かなくなるだけだ。

#### ■人をどう見ているのか

現在、ハルナグループには500人ほどの社員がいる。彼らの生き方に対して「こうした」と説教したことはない。唯一「迷惑をかけてはいけない」ということを言っている。

ハルナグループを創立して30年近くの年月が経ち、今、私は一歩引いた立場にいる。60歳頃に出会った若い人が経営の中樞を担っている。

例えば誰かを課長にする、役員にするといったとき、細かい調査などはしない。そこは非常に感覚的であつたと思う。この組織の中で、存在する意味があるのか、いい仕事を自分で見つけてやるだろうか。人を見てみると、そういったことが徐々に明瞭になってくる。

もちろん、相手の表情からも窺える。嬉々としてやっているな、というのが見えてくれば、それは適任ということなのだろう。「やりたがっている顔」とでも言うのだろうか。とは言っても押し付けるわけにはいかないので、「どうだ、やるかい」と聞く。そのときの反応次第で確定的となる。

反対にいうと、相手のことを気にかけて見ていてあげる、ということが大事であり、私は実践してきたつもりだ。人間だから、無理そうだな、ということもある。そのときはこちらから「やめておこう」と声をかける。

性格、趣味嗜好、年齢、性別を問うということもしない。職歴が短くとも、ポンと上の立場に置いた方がおもしろい、という人だっているからだ。実際、ハルナグループでもいる。あることに対して経験豊富であるか、そうでないかということもあまり関係ない。私自身の

ことでいえば、製造業はまったくの門外漢であったのだから。わからないことを恥じてはいけない。

しかし失敗したとき、どう責任を取るか。この一点はよく話し合った。私自身、どの人生の局面においても常にそのことは考え、準備していた。例えば、会社が潰れてしまい借金が残ってしまうという可能性があったとしたら、自分個人の所有する土地を売ってお金を返すといったことだ。



## エピローグ 自分という個を見つめて

### ■自身のルーツについて

私の家族は、日本の植民地政策に引きずられていたところがある。祖父の時代から満州で開院し、その後北京へと移り、父が病院を引き継いだ。戦争が苛烈を極めると、私たち一家は北京から日本へと戻ることになる。私の幼少期は自ずと戦争によって形成されていったといっても過言ではない。幼少期の出来事、心に宿った想いというものは成長しても残るもので、三つ子の魂百までとは、よく言ったものだ。子どもの目というものは実に正直だ。

前に、私は日本人であることに誇りを持ってなかったと書いた。無国籍人でありたいとも。それは、中国人を平気で殴り、威張り腐っている日本人をかの地で見してきた経験に由来する。日本人は果たして人類史において、どう位置付けられるのだろうか。殊に、中国や朝鮮半島をはじめとしたアジアを植民地政策の対象として捉えていた時代、多くの日本人は自分たちが優秀な人種であると信じていたかもしれない。この経験が、日本人という概念を生み出してしまったのだろう。日本人とは何か。そこに縛られる必要があるのかにあるのか。

結果的に、自身の人生を振り返ってみると、私はサナトリウムを退院したあと、貿易関係の職に就き、世界を放浪するかのよう駆け巡った。それは、ある意味では自身のルーツ、故郷を探し求めている旅路であったのかもしれない。

一つの終着地点があったとすれば、それが水との出会いであったのだろう。イギリスの湧き水と出会い、水の仕事に取り組もうと日本の群馬の地でハルナビレッジを興した。それは必然であったといえよう。

水は無国籍である。この地球上に水は湧き上がり、流れてゆく。留まることはない。差別なく常に流れてゆく。私は、一滴の水になったのだ。どこに流れるということでもない。どこから生まれたというのでもない。流れるために、在るために、そして人々の渴きを潤すための水。水は、どこにも属さない。

私は日本で育っていなければ水に携わることはなかったと思う。それほどまでに日本の水はおいしい。これは誇るべき事実である。

#### ■ 人生を振り返ってみたとき

90年近い人生を振り返ってみたとき、気楽に生きてきたという感触はない。多くの人同様、

自分でああやりたい、こうやりたいと思って過ごせた時間は少なかった。これでいいのだろうか。常に自省の意識は働いている。あるいは、何かを追い求めている。そういう感覚がある。自分で納得できた時間は、果たしてどれくらいあるのだろうか。ふと考えてみたとき、徒労感を覚えることがある。もちろん、その瞬間においては、何かしらの喜びや幸福をつかんではいたのだろう。だが、つかんだ途端に指の間からぼろぼろと落ちていく。

20代の時、演劇に夢中だった。実に刺激的な日々であったが、戻りたいかというのを傾げる。経済的にも身体的にも辛かった。いい思い出とはいえない。こうして回顧しているうちにも、嫌な気分になってしまう。辛かったからこそ、記憶もあの時抱いていた感情も生々しい。正直言えば、好んで思い出そうとしたことがなかった。

ただ、あの頃はやりたくて仕方なかった。演劇から離れようと思っても、意志だけでは難しかった。

30代以降50代の終わりまでは、多少なりとも経済的に安定していた時期ではあった。もちろん負債の返済はあったが、幸いなことに返済可能な仕事に従事できた。

60代以降は、ほぼハルナビレッジとともに歩んできた。何十年も一つ事に関わったのは初めてのことだった。率直に言えば、このときの私も、やはり演劇への未練を引きずって

た。気持ちの半分は演劇に向いていたのだ。しかし、若い頃の医師の言葉がどうしても頭に残っている。「体が無理だからやめろ」。演劇への想いは消極的になった。

なぜここまで水のビジネスに邁進できたのか、情熱を持てたのか。振り返ってみると、自分でも理解できないところがある。何とも不思議な心境だ。

私が80代に差しかかった頃、長男が跡を継いで、現在に至る。承継に成功すると、肩の荷が本当に軽くなった。彼は私が創ったものを、彼のやり方で大きくしてくれている。正社員の数も300人から500人にまで増えている。ある程度の成長をしている会社を、さらに安定させ成長させていくのは難しいことだと思う。

次男は、学生時代からずっと海外で暮らしていた。長男は短期留学の経験はあれど、海外に住んでいたことはない。次男自身が望んだことだ。このことが今、彼の人生に生きている。現在、彼はスペインに住み、ハルナグループの海外事業を牽引する役割を担っている。二人の兄弟で、こうも違うものか、親でありながら驚かされている。

長く生きてくると、いよいよ世の中と決着をつけなくてはならない、と感じる時が訪れる。一般的には定年を迎える60歳頃なのだろう。私の場合、六十路に差しかかる50代半ばの頃は少し慌てふためいた時代だった。そのときも、今のようには人生を振り返ってみていた。もっ

と素晴らしい成果があってもいいのではないかと思う反面、いやもう十分やってきたではないかという思いもあった。焦燥に近かったのかもしれない。すると、本当にこのままでいいのか、という物足りなさが強くなった。

今現在、私の心は、もう十分やってきたではないかという思いへと揺れている。欲張ってはいけない。傍目から見るとき、一定の成果をあげることはできたはずなのだから。

これまでの人生で多くの方の手助けがあった。しかし、いよいよ最後の場面を迎えたときは、自分の手でやらなければならない。私はその時期を迎えつつある。

これは葛藤である。かたや常に変わらないといけないと考えているからだ。その繰り返しなのだ。

### ■演劇への想いと後悔

ある年齢に達したとき、演劇の世界だけで生きていくことが非常に狭いものに感じられた。先が読めてしまったというのか。自分が想定できる将来が待っているような気がしたのだ。

アメリカやヨーロッパの演劇を観ているうちに、演劇とは地域に根ざしたものだという思いを強く持った。なぜかといえば、言葉の問題があるからだ。

映画と比べてみると、映画は世界各国、スクリーンを通して、字幕あるいは吹き替えで誰でも楽しむことができる。だが、演劇はそうはいかない。確かにインターネットを通して観ることも可能になったといえるが、基本的には劇場に足を運ばないと観ることができない。台詞なども瞬時に解さないとならない。台詞は言語であり、もつといえは地域となる。

少なからず、私は演劇というメディアにある種の不満と限界を感じていた。狭い世界、限られた地域というものに引つ掛かりを覚えてしまった。演劇に変わるものを探すとき、私にはこれらが大きな動機となっていた。

また、私の両親のこともあって、経済的な理由で演劇を続けるのは難しいだろうと考えていた。今では、この考えは間違いだっただと思っている。飯が食べられなかつても、演劇を続ければよかつた。しかし、続けていれば、きっと死んでいただろう。結果的に私は妥協した生き方を選んだ。

体を壊したことも悔やまれる。あの頃、体を壊さず、3年間もサナトリウムに入っていないければ演劇が続いていたに違いない。いくら食えないといつても、演出家になっていたりはたまたま映画監督になっていたかもしれない。

この演劇への想いは、生涯頭から抜け切らなかつた。だから、演劇の世界から離れた以降

の人生、どこか満足のいかない気持ちを抱き続けていた。それは90歳になろうとしている今でもある。

私にとって、経済活動というのは手段であって目的ではない。仕事で躍動していくという想いはなく、あくまで生活のためのものであった。偽りなくいえば、私は失敗だった。

60近くからハルナビレッジを創業したが、その前に演劇の世界に戻ろうとすれば戻れたかもしれない。友人である声優の羽佐間道夫は、私にこう言ったことがある。

「自分が演出家⇨社長となつて、従業員をキャストイングする。形としては演劇と似ているかもしれない。ただ、僕はそれを青木のノスタルジーだと一刀両断したことがある」（青木清志『未来を構想する』）

手厳しい意見だが、当を得ている。ただ、言い訳ではないが、私にとって、ものづくりと演劇にはどこか共通点があった。美学、つまり感性を震わすという点では同じなのだ。

しかし、今振り返れば、貿易活動をしていた20年もの時間は長すぎた。確かに世界各国を回るのは楽しい時間ではあった。だが、私は溺れてしまっていたのだ。もっと早く整理しておけば、違う道があったのだろう。

私は演劇に対して、どこまで本気に向き合ってきたのだろうか。今からでも遅くない。なにかやり遂げられないものだろうか。こういうことも常に考えている。

演劇の世界に身を置いている時代もあった。それが徐々に観客席の方へ回って、眺めるだけになってしまった。舞台の上にいる当事者感覚は抜けている。演劇に対する想い、今でもその整理はついていない。

ある時期、考えたことがあった。自分で劇団を作ってみてはどうだろうか、と。しかし、私にとって、劇団を作るということは経済活動である。しっかりと利益を得て、劇団に携わる多くの方々が生活できることまで含んでいる。趣味で終わらせるわけにはいかないという考えが強い。

現在に限らず、私がまだ演出家を志していた頃からすでに演劇で食べていけることは相当地な至難であった。つまり、日本の劇団で食べていけるところは大変限られているし、私の考えなどは非現実的なのだということになってしまう。

いくつか俳優の話もいただいたことがあった。しかし、私は俳優になりたいわけではなかった。劇評家というのにも関心がなかった。幸いなことに世界の様々な都市で観劇することもできた。実に楽しい日々ではあった。だが、やはり舞台を動かす人間、演出家になりたかった



のだ。

反対にいうと、私には努力が足りなかった。本気でやろうと思えばやれたかもしれないのに、机上の空論として机を蹴り上げてしまったのだ。なぜもっと経済活動としての演劇の道を模索しなかったのだろうか、という後悔がある。

規模にこだわる必要はなかったのかもしれない。小劇団で何人かの役者を抱え、自分で育てる。そして、小さいなりの経済活動を行う。それは楽しいことではなかつただろうか。

演劇の世界から長らく離れていたとしても、おそらくチャンスはいくらでもあった。間違いない、私が真にやりたかったことのはずなのだ。演劇への好奇心も薄れていたのだと思う。今さら何を言っているんだという自身への嘲笑もあった。私は真の演劇人になり得なかった。

土方与志さんは、そういう意味でも私の師であった。土方さんは自身の財をもとに築地小劇場を作ったのだから。道半ばで築地小劇場は分裂し、土方さんは離れることになってしまったが、常に革新的であったと思う。その土方さんに私は魅かれていたのだ。

90歳目前の私が、言わばプロデューサーとなって演劇の演出ができるのか。肉体的にも精神的にもしんどいことではある。私の最後の狙いというか。どうしたら本気で実現できるのか、考えさせられる日々を送っている。



第二部 青木さんへの回帰

本書は、編集者である私（山本和之）が、青木清志さんのお話を伺い、様々な資料を参考にまとめている。通常の書籍の体裁としてはふさわしくないかもしれないが、青木さんのリクエストに応じて小説風に本書の刊行経緯などを振り返ってみよう。

## 1、出会い

新宿にある文壇バー「風紋」は2011年、開店50年を迎えようとしていた。花園饅頭やゴールデン街周辺の喧騒をよそに、外では冬の風が舞っている。

私は太宰治研究のため、学生時代から風紋を訪れている。風紋のマダム・林聖子さんは、太宰の短編小説「メリイクリスマス」の登場人物のモデルであつたからだ。私は太宰の女性モデルについて卒論をまとめており、林さんにお話を伺う目的で、初めて店を訪れた。

それから10年以上の月日が経とうとしていた。私は自ら起こした出版社で、風紋の開店50年を祝す『風紋五十年』という書籍を刊行することを提案していた。基本的には林さんからお話を伺い、私が書き下ろしていく。まさに、今回の青木さんの書籍と同様だ。また、本書には祝辞として、林さんの友人・知人、風紋の常連客や関係者から文章をいただくことになっ

ていた。

「青木さん？ どういう方なんですか」

「古いのよ、もうかれこれ60年以上になるんじゃないかしら」

橙色の暖かい照明の下、私と林さんはカウンターで横並びに座っていた。

林さんは遠い目つきをして、カウンター脇にある本棚を眺めている。つい私もそちらに目をやるが、本棚に収められた書籍の背に「青木」の文字はない。

「作家の方ですか」

「いえ、違うの。私、若い頃に演劇してたでしょ、舞芸にいてね。そのときの同期生。青木さんは60歳くらいから飲料メーカーを始めて……」

林さんの話ほとんどと進むが要領を得なかった。私は一度話を止め、一から聞くことにした。

林さんが言うには、青木清志さんとは舞台芸術学院（池袋）という演劇の専門学校で同期生だった。戦後まもなくのことだ。何歳か青木さんが年下で、林さんは仲間たちのお姉さんだった。

「その青木さんがね、この前の50年のパーティーのとき、お電話くれたのよ。ほら、新聞に

大きく出たものだから」

風紋の開店50年について、各紙が大きく取り上げてくれた。懐かしい旧客が電話や手紙をくれたという。

青木さんは演劇の世界から身を引いた後、どういう経緯なのかわからないが、飲料メーカーを自ら起こし、現在「社長」であるという。

「せっかくだから、青木さんに何か書いていただけないかと思ったの」

「そういうことですか、いいですね」

私はようやく納得し、林さんの案に乗った。

それが、私が青木さんを知るきっかけだった。言うなれば、林さんが、文壇パー「風紋」が、そして、太宰治が引き合わせてくれたのだ。

## 二、思い出の社誌制作

林さんから早速青木さんの会社を教えてもらった。ハルナビバレッジという会社に、私は今回の趣旨の説明を加えた原稿依頼を手紙に認めて送った。しばらくして、秘書の方からメールをいただいた。青木さんは快諾とのことだった。

青木さんは秘書の方を通し、すぐに原稿を送ってくれた。タイトルは「聖子座への祝杯」とあった。「あなたに会うと、いつも演劇学校で過ごしたあの時代の聖子さんに自然と重なってしまう」から始まる文章は丁寧で、人柄がにじみ出ていた。2011年当時からすると、60年ほど前の思い出だ。よく覚えているものだなと、と思ったが、反対に言えば、青木さんにとって、演劇学校の時代が楽しかったのかもしれない。

読み終わってすぐに校正ゲラにし、メールで送ると、特段大きな書き直しもなく校了となった。書籍が完成したのが2012年5月のことだった。青木さんは数十冊購入してくれ、後日、一度会社に来てくれないかという話だったので、私はお邪魔することにした。

JR東京駅八重洲口から、さくら通りを日本橋方向へ行く。丸善、高島屋を過ぎると、ハ

ルナビバレッジの東京本社が入るビルが建っていた。メールや電話のやり取りだけであったので、私は緊張していた。秘書の方に取り次いでいただき、応接室に通してもらった。濃い緑色のソファに腰かけ、数分ののち、

「やあ、今日のご足労いただいて」

と、銀白色の髪をした長身の男性が入ってきた。

青木清志さんだった。この頃の青木さんは80歳前だが、とてもそうは見えない。眼鏡の奥の瞳は色濃く、しっかりと対象を捉え、柔らかな笑みを湛えている。風格もあり余裕もある紳士といった第一印象で、私はさっと立ち上がり、改めてこのたびのご寄稿の礼を口にした。

「元々、林聖子さんとはどういったご縁だったんですか」

「太宰治がきっかけでした」

「ああ、彼女は太宰の小説のモデルになったんですね。すると、あなたは太宰ファンですか」

「はい、今は出版をしています、小説も書いています」

「ほお、そうですね」

一方的に何かを話すのではなく、こちらの話もしっかりと聞いてくれる。そのうち、私は緊張も抜け、リラックスした気分になっていた。



「青木さんは原稿にも書かれていましたが、元は演劇人だったのですね」

「ええ、ここをやられてしまいましたね」

青木さんは苦笑いを浮かべながら、自身の胸の辺りを撫でる。ギンガムチェックのジャケットに、薄紫色のシャツが覗く。普通ならなかなか着こなせないコーディネートだが、青木さんが着ると嫌味ではない。

「私は役者ではなく演出家を目指していました。肺さえ平気だったら、きっと演劇の道を進んで、こういう仕事はしていなかったでしょうね」

演劇の道を行ってきたためか、80歳前だというのに青木さんの声は低く太く、よく通る。これは林さんにも言えることだった。演劇をしていた人は腹から声を出す訓練をしてきたのだらう。それが身についているから、発声が綺麗だ。

「今日、来てもらったのは相談があったからなんです」

青木さんの相談は2件あった。

一つは、日刊工業新聞社の井水治博社長との紙面对談を行うので立ち会ってほしいということ。この対談は、計11回も行われ、その大半を私は同席させてもらうことになった。ハルナビバレッジの業績に関する話というよりも、時事、歴史、環境、経済、金融など幅広いテ-

マで行われ、大変勉強になった。

もう一つは、社誌制作であった。これも先に結論を言ってしまうと、計4冊制作することになった。タイトルは次の通り（左ページ写真参照）。

・『はじめたら、おわりはない』

・『一滴の水』

・『未来を構想する』

・『はじめたら、おわりはないⅡ』

特に思い出深いのは、『はじめたら、おわりはない』とその第2弾の書籍だ。いずれも識者やハルナグループ役員、一般社員たちとの対談集（中には鼎談やディスカッションもある）となっている。

最初に作られたのが『はじめたら、おわりはない』。このときは、20組との対談などが行われた。毎回異なるテーマを、だいたい1組あたり1時間半から2時間行う。同席し、撮影する私でさえ疲れることがあったのに、青木さんはこのスケジュールを淡々とこなしていた。



しかも、各人とのテーマはすべて青木さんが立案していた。

印象深い対談は2組ある。一つは鈴木守氏との対談だ。鈴木氏は群馬大学、上武大学の学長を務めた、いわば群馬県の名士だといえる。医学部を卒業され、マラリアや寄生虫の研究を専門とされていた。

対談の中で、寄生虫の話から花粉症やアトピー性皮膚炎の話題となった。私は大変興味深く話を聞いていた。少し長くなるが引用しよう。

鈴木（前略）回虫ですが、これは人類の誕生の前から存在します。それから、ずっと共存してきたわけです。何十万年と一緒にいたものを、この50年くらいで、ほとんどゼロの

状態にしてしまいました。(中略) 回虫が体で悪さをしないように、免疫機構が備わっていたのですが、相手がいなくなってしまうました。(後略)

青木 花粉症やアトピー性皮膚炎にも関わってくる話ですね。免疫が別の相手を攻撃することによっておこされる疾患と考えるのは、言い過ぎでしょうか。(中略) そうすると、また回虫を体に埋め込まないといけませんね(笑)。

鈴木 大学にもよくそういったお電話をいただきますよ(笑)。(中略) 一人に回虫をかけたからといって、治るわけではありません。社会全体で、しょっちゅうサイクルのように回っていないと意味がないんです。

青木 ずっと人間と共存していたのには、意味があったということなのでしょうね。

鈴木 きれいにし過ぎて、かえって困った結果を招いているとも言えるでしょう。

こういったおもしろいやりとりは、そのとき、その場で急遽なされるものだ。もちろんテーマは決めてあるが、話の流れは当日にならないとわからない。

実際、人によっては意見が噛み合わず、議論が白熱することもあった。見ている側としてはハラハラするのだが、青木さんは気にしていないようだった。

「違う意見を聞けることは大事だ。その人はその人の考えがあつて、否定すべきものではない」

意見や主張が異なるからといって疎外する。そういったことは青木さんの念頭にはない。

もう一つ、おもしろかったのは先に挙げた風紋の林聖子さん、舞芸時代以降、プライベートでも親交の深い、声優・羽佐間道夫さんとの鼎談だ。これは風紋で行われた。

本書の中で、唯一仕事などの関係から離れた鼎談であった。青木さんと羽佐間さんは同い年、林さんはお二人より5、6歳年長だ。ざつくばらんの鼎談となり、初めて私は青木さんの異なる面を見た。引用してみよう。

青木 もう今から60年近く前。実にその頃、僕らは舞台芸術学院という演劇学校の同期生だったわけだ。聖子さん、あなたは昭和27年でしょ。

林 そう。私が入ったのは昭和27年。

青木 僕は翌年28年、羽佐間も一緒だな。あのとき、聖子さんは近寄りがたかったよな。

林 一所懸命、大人ぶってたのよ（笑）。

羽佐間 何かね、大人のようなね。

青木 だって我々は子どもだから（笑）。

終始一貫、和やかな空気では進んだ。

羽佐間さんは青木さんの友人なので、まったく遠慮がない。ズバズバと青木さんに迫る。すると、青木さんは時折折困ったような苦笑いを浮かべて発言することがあった。普段の青木さんは堂々とし、ゆつたりと話すのに。

もちろん、友人だから羽佐間さんは「おい、青木」などと、呼び捨てだ。青木さんと呼び捨てにする人など、ほとんど、いや、まったくといっていい。とても新鮮だった。

やはり友人たちと話すとき、青木さんは普通の人になるのだな、と、私は密かに微笑ましい気持ちになっていた。

もう一つの思い出の書籍『はじめたら、おわりはないⅡ』は、青木さんが制作する社誌としては最後になることを前提に企画された。ハルナグループ創立25年を記念して作られたこの書籍は、2020年2月23日発行である。実際、青木さんはこの年、会長から名誉会長となり、実質、現場から身を引くことになった。

この書籍は第1弾同様、対談が中心だが、役員の他に女性社員、中堅社員、若手社員と世代ごとにディスカッションを行っているのが特徴だ。いわば青木さんにとって、直接語りかける最後の機会ともなった。

このとき、私は全部の対談に立ち会ってはいない。多くが群馬本社で行われたので、音声のみを聞いていた。印象的だったのは、女性社員たちとのディスカッションである。どなたかは声だけなのでわからないが、感極まって泣いている方がいた。おそらくその方は青木さ

んへの恩、会社への恩、それらもあったろうが、青木さんが現場から離れることをうすうす察して、淋しさを覚えたのではないかと思った。

実際、この書籍を作るに当たり、青木さんご当人も一抹の淋しさを感じていたと思うし、私もそうだった。

「これで最後になるね」

制作中、何度か青木さんがこぼされることがあった。

60歳以降の25年もの時間、ハルナグループに心も身も任せていた青木さんは、まだまだ何かを成し遂げたいという思いもあったろう。それはハルナグループではなくとも、違う場所、違う何かであったとしても。

その頃、井水社長との対談でも、自身が経営から身を引くという発言をしていた。

「次は美術館の館長になります」

それが、青木さんの次なる事業、榛名美術設立へとつながっていく。このことは、後ほど詳述していこう。

青木さんと初めての面談を終えた私は、群馬・高崎の本社や工場、倉庫視察などをさせて



もらった。毎年6月に発行される「SRR (Stakeholder Relation Report)」の制作も依頼され、2022年まで10年近くお手伝いした。

「SRR」は1年間のハルナグループの業績などをまとめたもので、50ページ弱もある。A4判フルカラー、テキストや写真、データも多く読み応えがある。これに、青木さんは毎回メッセージというよりも評論を載せていた。

2015年の「SRR」の評論タイトルは、「2035年——日本と世界、そして地球の20年後を読む」。人口統計をもとに、地球環境の変化の推移、米国の市場・金融の将来、日本の少子高齢化社会における展望などをまとめている。青木さんは毎回これを執筆していた。ページは見開きで2、3ページに及ぶこともあった。

青木さんの未来を読む力、先見性というものは、ハルナグループの功績を振り返ってみると実感することができる。何より創業時、缶飲料からペットボトル飲料への移行を即座に捉えていたことが物語っている。

私の年代（2023年現在40代）にとって、「桃の天然水」は印象的なドリンクだ。当時、小室ファミリー」のスターの一員だった華原朋美が「ビュービュー」と口にするテレビコマーシャルは大変印象的だった。その「桃天」の陰の功労者が青木さんだったとは驚いた。

この「SRR」の最初の制作後、完成物を青木さんに見せたとき、青木さんから苦言が呈された。「表紙の色がイメージと異なっている」と。初めて青木さんからの叱責を受けた場面なのだが、青木さんは怒鳴り散らす訳ではない。静かに淡々と事実を述べる。

仕事を通して感じたのは、青木さんは本当に人間観察が鋭いことだった。何かの会議や打ち合わせ、対談などが終わったあと、

「あまり乗り気ではなかったかもしれないね」

と、お相手の様子について洩らすことがあった。

それは概ね的確であった。1時間や2時間、ほんの僅かの間に表示される相手の顔色の変化などに、青木さんは敏感だった。私は率直に言って、青木さんの前では「油断」を見せないようにしていた。当然と言えば当然で、クライアントを相手に手を抜くことはないし、油断することもない。しかし、特に青木さんとお会いするときは、気を引き締めた。緊張感はあったものの、青木さんの言葉を少しも聞き逃すまいという気概があった。私にとって、青木さんの仕事は勉強になると同時に、楽しいことでもあった。

こうやって書いていくと、青木さんが「畏れ」のある人物に捉える人もいるかもしれない。

もちろん、仕事においてはそうだとしてもプライベートは異なった。先ほど羽佐間さんのことに触れたが、プライベートで友人たちと話すとき、青木さんは「俺」と言うこともある。

仕事でお付き合いするのと別に、私はプライベートをご一緒することもあった。風紋に行くこともあったり、食事会に招いてもらったり、といろいろ貴重な体験をさせてもらうことがあった。

これは青木さんが2020年以降、ハルナグループから一線を退いて、榛名美術を設立してから話である。半分仕事、半分プライベートという形で、青木さんは美術オークションに誘ってくれた。

私は自分の仕事柄、美術と関わることも多いのだが、オークション現場に赴くことはなかった。会場に所狭しと、見方によっては雑然と作品が並んでいる（というより置いてある）。中には有名な作家の作品もあるわけだが、もはや作品というより「掘り出し物」といえよう。「あなたはどのようなのが好き？」

私は猫を飼っており、猫をモチーフにした作品が好きだ。そのとき、熊谷守一や藤田嗣治の猫の作品もオークションにかかっており、会場で観ることができた。青木さんは、顔をしかめた。

「私は、あまり猫が好きじゃないんだ」

私は苦笑いを浮かべ、曖昧に返事した。

入札の時間が始まり別室へと移動すると、オークションナーが壇上に登り、息つく暇もない速度で次々と作品をさばいていく。青木さんも割り当てられた番号が書かれている札を持って、時折手を挙げる。事前に何を入札するか聞かされていないから、こちらはハラハラしながら様子を見守っていた。そのときは、木下孝則の花の絵などを入札し、競り落とした。

木下孝則は、私にとつて少し印象的な洋画家だ。木下は、林聖子さんの母・秋田富子さんの絵のお師匠だったからだ。

林さんの父・倭衛しやえは、大正期のアナキスト・大杉栄の肖像画〈出獄の日のO氏〉を描いたことでも知られる洋画家だった。そして、母・富子さんは冒頭で触れた、太宰治の短編「メリクリスマス」の他に、「水仙」「きりぎりす」などのモデルとも言われている。つまり、秋田富子さんは太宰研究にとって、重要人物の一人でもあり、太宰との親交も深かった。その富子さんは若い頃、絵描きになりたかったので木下に師事していた。

青木さんの他に札を挙げる人はいなかった。他の落札価格に比べると、割とリーズナブルに落とした。青木さんは、にこっと笑みを浮かべ、

「花の絵がほしかったんだ」

と囁いた。

他にも何点か入札しては諦め、ということを繰り返しつつも、4、5点落札した。私は自分のお金でオークションに参加するのはとても無理なことだが、疑似体験することができた。

一般財団法人榛名美術の設立の話は、青木さんご本人から聞かされ、私に理事就任のお話を持ってきてくれた。私は即断といった形で、お引き受けした。

また、新しい現場で青木さんとお仕事ができる。交流が持てる。何より嬉しい出来事だった。

### 三、ビジネスより芸術

なんだ、東京の主要都市と変わらないじゃないか。

高崎駅にほど近い風景が、徐々に新幹線の車窓を流れていく。地方都市として名を知られている高崎は、私の故郷である都下の街と、そう変わらない賑わいを誇っているように感じた。

ホームに立つても、特別暑くも寒くもない。東京と群馬、同じ関東なのだから当然なのかもしれない。

私は初めてハルナビバレッジ群馬本社を訪れたとき、そんな風感じていた。

一般財団法人榛名美術の所在地は、かつて青木さんが住んでいた榛名山にほど近い平屋の一軒家だった。ただ、一軒家といっても都会にあるものとは規模が異なる。1400坪近い敷地に、洋風の建屋が立ち、中はフローリングで、別荘小屋に近い印象だった。

ここに、私が初めて訪れたのはハルナグループのウインタースクールの講演を聴きに行ったときだった。だが、それからしばらく時間が経ち、久しく訪れていなかった。

高崎駅から乗用車に乗り、徐々に山間部へと入っていく。都会の街並みは、仮初めのもの

だったのか、深い緑をまとった山々が姿を現してくる。遠くに、俯き加減の像らしきものが見える。

「あれは高崎観音だよ」

青木さんがフロントガラスを指差す。

群馬県は日本一、免許保有率が高いと言われる。実際、車社会で、道路が混雑している。渋滞を抜け、40分くらいすると、ようやくかつての青木さんの旧宅に到着した。

榛名美術の本拠地は、建物を「絵画の館」、その脇にある庭園を「彫刻の杜」と命名された。東京の本社の各部屋の壁に、青木さん自身の絵画コレクションが展示されている。社員の方々に観てもらい、刺激を受けてもらうことが目的だった。青木さんは、

「自由に観て、自由な感想を持ってほしい。分からなくなっていたといいんだ」と口にしていった。

実際、芸術と呼ばれる分野は、教養がないと鑑賞するに値しないと、臆病になる人が多い。だが、美術にしる音楽にしる文学にしる、受け取る側は自由に受け取ればいい。何も自身の知識がないからといって、恥ずかしがる必要もない。

「ピカソの絵は下手くそだ」

「ユトリロの白は汚い」

「モディリアアーニの人物は、間延びしていて気味が悪い」

そんな感想を口にしたっていい。自分がそう感じたなら、己の感性を信じればいい。青木さんは、そういうことが言いたかったのだろう。

茨木のり子という詩人に、「自分の感受性くらい」という詩がある。長いが引用しよう（『茨木のり子』『自分の感受性くらい』花神社）。

ばさばさに乾いてゆく心を

ひとのせいにはするな

みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを

友人のせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか



苛立つのを

近親のせいにはするな

なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを

暮らしのせいにはするな

そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を

時代のせいにはするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい

自分で守れ

ばかものよ

もっと勇氣をもって、己の感性を信じればいい。

2020年4月に榛名美術が設立され、その年の秋に1回目の企画展が催された。美術館内にはピカソの作品をはじめ、古今東西問わず、様々なモチーフの作品が所狭しと並んだ。多いときは、60点近くが展示されていた。

彫刻の杜には、青木さんと同郷の彫刻家・高濱英俊氏のギリシア神話をモチーフとした作品が並べられた。1作品目は《ゼウス》。白亜の大理石はヨーロッパから輸入され、荘厳なゼウス像がどっしりと収まった。圧巻な姿に、青木さんも喜んでいたが、来場者も目を見張った。

マスコミメディアが取材してくれたおかげもあって、企画展には多くの方が来場した。県内をはじめ、東京や近県からも来ていた。青木さんはそのたび、客人を出迎え、丁寧に作品の解説を行っていた。

これだけの作品の数なのに、無料で鑑賞することができる。来場者の中にはピーターになり、何度も訪れる人がいた。美術に触れることはもとより、青木さんのファンとなって、

会いにくることが目的になった人もいた。

青木さんは徐々に、美術館の館長として、ご自身の好きな芸術に身も心も置くようになっていた。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、来場者は減ることがあり、企画展も開くことができないこともあった。それでも、工夫を凝らして企画展を開催し、2022年11月には、晴れてレセプションを行うこともできた。秋の晴天の下、皆で軽食を口にし、ゆったりとした時間を過ごしていた。

手前味噌で恐縮だが、私が作った詩で榛名美術の魅力を紹介させていただこう。

#### 榛名の神話

春になれば

桜の花びらが肩を色づく

白亜の神々たちは

互いに頬を染め

生温かな風に

ほっと息をつく

夏になれば

新緑に身を広げる

こう暑くちや裸でよかった

ギリシアの空気はもっと軽かった

人々の足音は軽やかに

澄んだ空気を胸に送る

秋になれば

ドウダンツツジの彩りに

淡いため息が耳朶を震わす

鳥も虫も息を吐くたび

ささやかに鳴く

能面を彫る日常が始まる

冬になれば

小雪が舞い身が溶け合う

霜を踏む足音が響き

散った後の樹の幹をこする

赤い屋根が夕日と同床する頃

館の主は帰路につく

しかし、青木さんの顔色は優れなかった。時折、二人きりで話すときも、厭世的なことを口にするようになっていた。

「もう日本に期待することなんてないよ」

達観した口ぶりで言う青木さんに、私は見捨てられたような感覚を抱くこともあった。青木さんの未来予測は当たることが多いからだ。

陰鬱とした雰囲気の原因は何だったのだろうか。

青木さんは、もう90歳近くなり、人生を生き切ったという感覚を持っているのかもしれないな

い。余生幾ばくもないという悟りの境地に辿り着いたのかもしれない。経営の最先端から身を引き、寂しさを感じているのかもしれない。

どれもが原因であるのだろう。だが、何か違う。

青木さんは、なぜこのタイミングで美術館を開いたのか。余生の楽しみといえはそうなのだろう。では、どんなエネルギーをもって、美術館を開くことを青木さんに課すのだろうか。その目に見えない力。その正体は何なのか。

#### 四、青木会長から青木さんへ 最後の書籍制作

先ほど、羽佐間さんが青木さんを「青木」と呼び捨てにしている、と書いた。一方、私の青木さんへの呼び方も変わった。

青木さんから、青木会長へ。

大人げないことを、あえて言えば、私は青木さんを「青木会長」と呼ぶことが嫌で仕方がなかった。もちろん社会人として、一つの企業の長である青木さんを公式の場で「青木さん」と呼べば、周囲から非難の視線を浴びることはわかる。だから、私は意識的に「青木会長」と呼んでいた。

当然ながら、私の立場としては、青木さん、つまりハルナグループは「お客様」である。そのお客様の経営トップの方を肩書で呼ばないという道理もない。

しかし、心情として私はどこか淋しさを感じていた。どうしても「青木会長」となると、

私にも遠慮が出てくる。『風紋五十年』を制作した際、出版記念パーティーが行われ、青木さんはスピーチのため、登壇してくれた。

普段、青木さんは風紋に来ることは滅多になかったので、会場はざわついた。

「あの人は誰なんだろう」

そういう表情が散見された。

実際、パーティー後、私は何人もの人に、

「あの英国紳士は誰なの」

「あんな素敵な方が風紋のお客さんだったの」

と聞かれた。

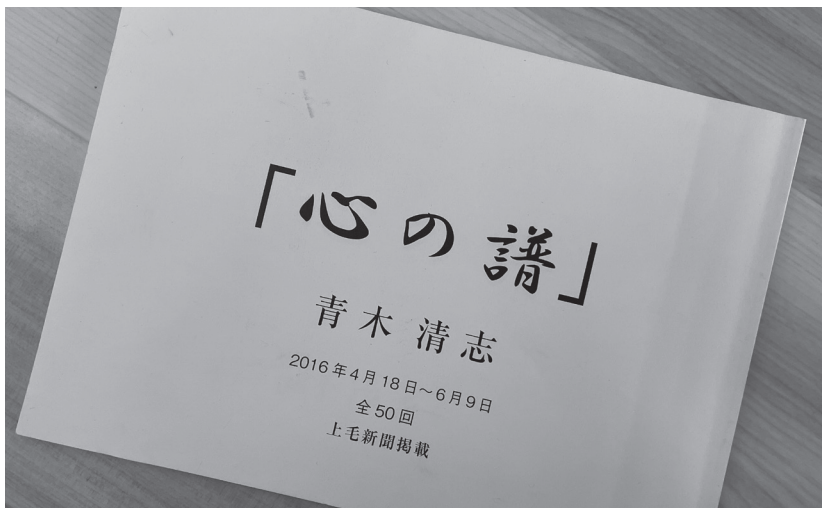
そのたび、私は嬉しかった。

「青木さんは聖子さんの演劇時代の同期生で、今は飲料会社を経営しています」

説明するのも誇らしい気持ちがあった。親しみを感じ、より近い方に思えた。

初めて青木さんとお会いしてから、もう10年が経つ。その間、様々なお仕事をいただいた。ハルナグループの方々にも、大変お世話になり、いろいろなことを教えていただいた。これもひとえに、青木会長のおかげである。





だが、私は「青木会長」から「青木さん」へ、  
帰れたかった。青木さんが会長職を退かれ美術  
館の館長となり、徐々に仕事でのお付き合いは  
減りつつあった。そういうしがらみが抜ければ、  
自然、私は「青木さん」と再び呼べるのではな  
いかと思えた。仕事の話は抜きに、芸術に関す  
る話、普通の世間話ができる関係に戻れるので  
はないか、と期待していた。

そんな矢先、2022年2月23日、一つの計  
報があった。風紋の林聖子さんが亡くなられた  
のだ。享年93。

堀辰雄の小説「聖家族」は、次のように始まる。

死があたかも一つの季節を開いたかのよう  
だった。

私は聖子さんの死をもって、二つのことを考えた。一つは私自身で風紋の思い出を書こうということ。これは実現され、書籍化することができた。

もう一つは、青木さん個人に関する書籍を作ろうということだった。いくら青木さんがお元気だとしても、残念ながらいつかは「そのとき」が来てしまう。これまでハルナグループを通して、青木さんの思想、主義、思考、性格など私なりに実感する機会があった。青木さんの半生を振り返った「心の譜」（上毛新聞社。153ページ写真参照）も読んで、青木さんの若い頃などの出来事はさらうことはできた。

晩年、林さんにもっと話を聞いておけばよかった、という後悔があった。というのも、私は林さんの訃報をご子息からの電話を受けるまで、まったく予期していなかったのだ。お年がお年だけに、唐突のご子息からの電話なら、林さんの死を連想してもよかったはずだ。しかし、私は「母が亡くなりました」の言葉を聞いても、ぴんと来なかった。

まだ林さんは生き続けるだろうと思っていた。時間は残り少ないけれど、まだ大丈夫だろうという当てのない樂觀をしていた。もっと太宰治の話を聞けたはずだ。風紋閉店後の心境も聞けたはずだ。でも、それを成せなかった。悔いがあった。

青木さんのことを考えた。

これまで青木さんの話は何度も何度も聞いてきた。仕事のこと、ハルナグループのこと。だが、青木さんが何を感じて生きてきたのか。素の青木清志を、私は何も知らないのではないか。いや、ハルナグループの社員の方たちも知らないのではないか。

善は急いで、私は青木さんにメールで企画書を送った。そのメール文で、私は意識的に次のように書いた。

「青木会長ではなく青木さんと、あえて呼ばせていただきます」

私は、青木会長の話ではなく、青木さんの話が聞きたいのだ。社会や世間のしがらみなど、すべて取っ払い、素の青木さんと向き合いたかった。

青木さんは快く引き受けてくれた。こうして本書の制作が始まり、毎週のように、青木さんと会う機会を得ることができた。私は、呼びかけるとき「青木さん」と口にしていった。青木さんは、特に怒ることはない。無礼だとは思うような人ではない。

ひよっとしたら、それまでもそうだったのかもしれない。私は、たまに思うことがあった。

青木さんは偉くなりすぎてしまったのだ、と。本当は、「青木さん」と呼ばれ、いろいろ芸術の話をしたかったのかもしれない。私が勝手に恐れをなして、及び腰すぎたのかもしれない。そう思うこともあった。

あるとき、移動中の車で、青木さんと会話したことがあった。

「今、小説は読まれてるの？」

「いえ、読まれていてもミステリーやライトなものが多いです。活字はネットなどで読むのですが、本を読む人は減っています」

しばらく口をつぐんだあと、青木さんは小さい声で、しかし力強い声で言った。

「小説が読まれなくなる文明は、いつか滅びるよ」

私は何も言わなかったが、心の内を熱くしていた。

ああ、やっぱり青木さんは経営者じゃない。芸術家なのだ、と。心底、芸術が好きなのだ、と。この会話を、私はずっと記憶している。青木さんを最も感じる事ができた場面だったから。

こうして最後の書籍である本書の制作が始まった。2022年3月のことだった。

結果から話せば、青木さんとの面談・インタビューは2022年3月以降、多いときで月に3度ほど行われた。年が明け、2023年1月をもって日程は終了した。トータルで実に約70時間に及ぶ。その成果が第一部の青木さんの聞き書きとなる。詳しいことはそちらを読んでいたかくとして、ここでは改めて、私から見たその時の青木さんを振り返ってみよう。

その前に、私が本書制作において重要だと思ったのは、「演劇的経営」である。青木さんは新聞対談をはじめ、社史においても「演劇的経営」という言葉をよく使っていた。もちろん青木さんが若い頃、演劇に夢中となり演出家を志望し夢破れたことから由来する。実際、「演劇的経営」を紐解くと、青木さんの立ち位置は演出家であり、適材適所の従業員がそれぞれの役割を果たしている。

なぜ、そこまで演劇にこだわるのか。いくら青木さんが演出家志望であったとして、それは20代の頃、ハルナグループを創立するまでの間、40年の隔世がある。以前、羽佐間さんは「演劇的経営」を「ノスタルジー」と評した。確かにその一面はあるのだろう。それと同時に青木さんの根幹には常に演劇がある。私は本書制作において、演劇が軸になるであると予感していた。

話は戻る。青木さんのインタビューは、時代を順繰りに追っていくところから始まる。それが自然と思えたからだ。その変遷については、第一部の通りである。

私が印象的だった、あるいは青木さんの感情の揺れを感じ取ったのは、大きく2点だった。一つは予感通り演劇である。もう一つは母である。

インタビューを何回か重ねた、ある夏の日。青木さんと私は榛名美術「絵画の館」の応接室にいた。昼ご飯を食べ終わり、

「せっかくだからインタビューの続きをやろう」

と、青木さんが持ちかけてきた。

正直言えば、この日はインタビューの予定はなかった。榛名美術の仕事として高崎入りしていたからだ。とはいえ、私はICレコーダーを持参していたのでセットした。

青木さんはやや疲れた表情で長い脚をソファに伸ばし、窓の外、緑が色づく彫刻の杜を眺めていた。

「やっぱり私には演劇への後悔……未練なのかな。そういうものがあるんだ」

「若い頃、肺結核を患って断念したからですか」

「もちろんそれもある。だが、いつだって戻ろうと思えば戻れたんじゃないかと考えるとき

がある。ハルナグループから身を離れ、あなたとこうして本を作るために話をするうちに気づいたことなんだ」

青木さんは遠くを見つめるように語り続ける。私はただ相槌を打って、静かに耳を傾けていた。窓の外には蝉一匹の鳴き声さえ聞こえない。静寂だけの午後だった。

「何かやろうとすると、頭に肺結核のことがよぎる。でも考えないようにしていた。考えたら何もできないからね。常に関心事が先立っていて、自分を突き動かしていた。うまくいかないときも、必ずその先に道があるはずだ。人には言えない自信があった。それはそれで楽しいことだ。何かをやれないとしても、自分を励ましながらやり遂げようとしていた。実際、やってみると体力は伴っていた。大病を患うこともあったが、誤魔化しながらやってこられた」

青木さんが一息ついた。

「例えばハルナグループを創立せず、演劇をやるということは考えなかったのですか」

「考えたことはある」

顔を少ししかめたあと、続けた。

「演劇を経済と結びつけたとき、成り立たないことがわかってしまった。そうすると腰が上

がらない。どうしても日本では演劇で携わる人たちを食べさせていくことは叶わない。それでもね、何かやれることがあったのではないかと気がするんだ。こうやって話していると」

青木さんは自身の聡明さを憎んでいたのかもしれない。あるいは、もう自分は若くはないということに、とつくに気づいてしまったのだろう。栄養失調になり、血を吐くまで演劇に熱中した日々。大学と演劇学校に通い、生涯の師と仰いだ土方与志との日々。あそこまで自分を突き動かしたのは情熱と若さ、そして体力であった。

だが、肺を患ったことで思い切りが利かない。つい余計なことを考えてしまう。食えなくなっただけいいじゃないか。演劇に身を滅ぼしたっていいじゃないか。感情と頭が追いついてこないもどかしさ。

黙って青木さんの言葉を追想していると、小さく笑った。

「体力が許されるなら、アフリカに一人で行ってみたいんだ」

「どういう目的ですか」

「ヨーロッパへの関心というのが薄れているんだ。アフリカは21世紀の今となっても、どこか未開の地のような気がする。人類の誕生というのか、もつといえれば地球の源が残っているのではないか。それを見てみたい」



実際に叶うのか叶わないのか。そこは問題ではない。青木さんは自分がしたいことを口にしてはいる。そして90歳になってもまだ、何かをし続けたい、やり遂げたいという情熱を滾らせている。年齢は関係ない。余計なことは考えない。アフリカの地で死んでも悔いはない。そういう想いを、私は汲み取った。

「母は優しい人だった。怒られたのは一度きりなんだ」

青木さんのインタビューで、特に印象的だったのは中国時代の生活であった。

巻頭にあるように、中国時代の写真は思いのほか残っていた。当初、青木さんは幼少期の話を、なかなか思い出せないでいた。しかし、写真を見ながら、あるいはある文献に付録されていた当時の北京中心街の地図を見ながら話すうちに、詳細の記憶が蘇ってきていた。それは第一部で確認していただきたい。

青木さんがお母様にこっぴどく叱られたエピソードも第一部で紹介している。病院の会計からお金をくすね、友達と学校をサボって映画を観に行ったことが露見したときのことだ。

お写真を見るに、お母様は聡明でいて、慈愛にあふれたお顔をされている。末っ子の三生さんを幼い頃に失い、実質、青木さんが末っ子となった。長男・陽生さんより可愛く感じた

のかもしれない。

インタビュー中、お父様のことやお兄様のことは、こちらから聞かないと話題に上ることが少なかった。だが、お母様について、青木さんが自発的に話すことが多かった。

印象的だったのは、早稲田大学の入学式のシーンだ。青木さんに内緒で、離婚したお母様とお父様が青木さんを待っていた。青木さんが言うには、お母様がお父様に頼んで差配したのだろうということだった。実際、そうだったのではないだろうか。入学に反対だったお父様をお母様が口説き落とす様子が思い浮かばれる。

学費が払えなくなり休学しようと思っていたところ、密かに学費を払ってくれていたのもお母様だった。大学と舞芸、アルバイトの日々の末、咯血した青木さんを真っ先に見舞い、涙を流したのもお母様だった。きっと青木さんは、お母様には心配と苦労しかかけていないという自覚があったのだろう。必ず恩返しをしよう、孝行をしよう。

だが、お母様は若くして亡くなられた。余命いくばくもないなか、青木さんは日々看病に徹したという。唯一、母子ゆっくりと過ごせた時間が、別れの僅かの合間だった。おそらく、最後まで青木さんにとって、お母様は優しい母であつたらう。

後年、青木さんは群馬・高崎の自邸（現在の榛名記念の家）の敷地に、お母様とお父様の

石碑を作った。

「ちょっとお参りしてくるから待っていてください」

高崎に行くと、必ず青木さんは一人車を降りて、石碑のある場所へと歩いていく。

「離婚してから母を引き取りたかつたんだ。でも、それができなかった。悔いが残る」

インタビューの節々で、青木さんはそうこぼした。

お母様は生前、青木さんをどう見ていたのだろう。きっと初志貫徹、言っても聞かないと思っていたのではないか。それとともに、我が子の夢を果たしてやりたい。医者になりたくない。演出家になりたい。そう言うのなら、それを叶えてやりたい。その一心だったのではないか。

今、青木さんはお父様、お母様の年齢を疾うに越し、齢90を迎えようとしている。

「あなたが好きなように書いてください。すべてを話せたと思いますから」

最後のインタビュー、青木さんにはこやかに笑った。

その顔は、仕事のとときの厳しいものではなかった。

青木会長ではない。真に青木さんの笑顔だった。

## 謝 辞

今回の書籍企画で、最も嬉しかったのは、土方与志さんのことを思い出すことができたことだ。人生において、私の師は唯一、土方さんだけだったと思う。長らく土方さんのことを思い出すことはなかった。若い頃の演劇時代を思い出し、ゆっくりと土方さんを偲ぶ気持ちになれたのは、何よりであった。

奇遇なことに、私の90年近い人生は30年ごとに区切ることができる。そういう発見を本書制作の段階で気づいた。生まれてから30歳まで、私は演劇に夢中であった。31歳から60歳まで、私は演劇への未練を断ち切ろうと海外を渡り歩いた。そして、61歳から90歳まで、私は水とともに流れ、我が身を一滴の水と喩えながら、ハルナグループという舞台を縦横無尽に駆け回った。

2023年6月27日を迎えると、私は90歳になる。本書は90歳を記念して制作したわけではなかったが、必然的にそうなった。そして、2026年にはハルナグループが30歳を迎える。私の人生になぞらえるなら、これから世界を駆け巡るのかもしれない。

今、私の心はどこか静かである。すっかり幕が降りたあとの、誰もいない舞台であるかのようだ。

だが、たった一人、その舞台で顔を上げている人物がいる。彼にはスポットライトが当たっている。それは、私である。90歳というと、もう何もできない年齢だと思うかもしれない。

しかし、年齢は関係ない。何かをやるうと強い情熱を持っていれば、まだ人生の幕は降りないのだ。

さあ、90歳を迎えた私は、何をやるうか。

最後に本書制作に携わってくれた方たちに感謝を述べたい。様々な出来事があつても、温かく見守ってくれた父、母、兄にも改めて感謝を。そして、今の私の家族、皆にも感謝を述べたい。

ありがとう！

青木清志

## 参考文献

※論文は本文内に詳細掲載。

- 『目加田誠「北平日記」』九州大学中国文学会編、中国書店、2019年
- 『北京 轉換する古都』佐藤清太、目黒書店、1942年
- 『北京』竹内実、文藝春秋、1992年
- 『演出家土方与志』津上忠、新日本出版社、2014年
- 『風紋五十年』林聖子、パブリック・ブレイン、2012年
- 『なすの夜ばなし』土方与志、影書房、1998年
- 『北京の日の丸』北京市政協文史資料研究会編、岩波書店、1991年
- 『スタニスラフスキーへの道』レオニード・アニシモフ、遠坂創三・上世博及訳、未知谷、2016年
- 『はじめなければはじまらない』須齋嵩、ハルナビパレツジ、2011年
- 『はじめたら、おわりはない』青木清志、ハルナグループ、2013年
- 『一滴の水』青木清志、ハルナグループ、2016年
- 『未来を構想する』青木清志、ハルナグループ、2018年
- 『はじめたら、おわりはないⅡ』青木清志、ハルナグループ、2020年
- 『心の譜』上毛新聞社、2016年



九十<sup>すいこん</sup>年の水痕 舞台に注ぐ光をもっと

2023年6月27日 初版発行

著者・発行人 青木清志

発行所 ハルナビバレッジ株式会社

東京本社：〒103-0027 東京都中央区日本橋3-8-4 日本橋さくら通りビル2階  
TEL：03-3275-0191（代） FAX：03-3275-0192

群馬本社：〒370-3531 群馬県高崎市足門町39-3  
TEL：027-387-0101 FAX：027-387-0102

編集・構成 山本和之（合同会社パブリック・ブレイン）

印刷 モリモト印刷

※本書収録内容の無断複製・コピーは禁じます。